



097656-000-3

特9-214

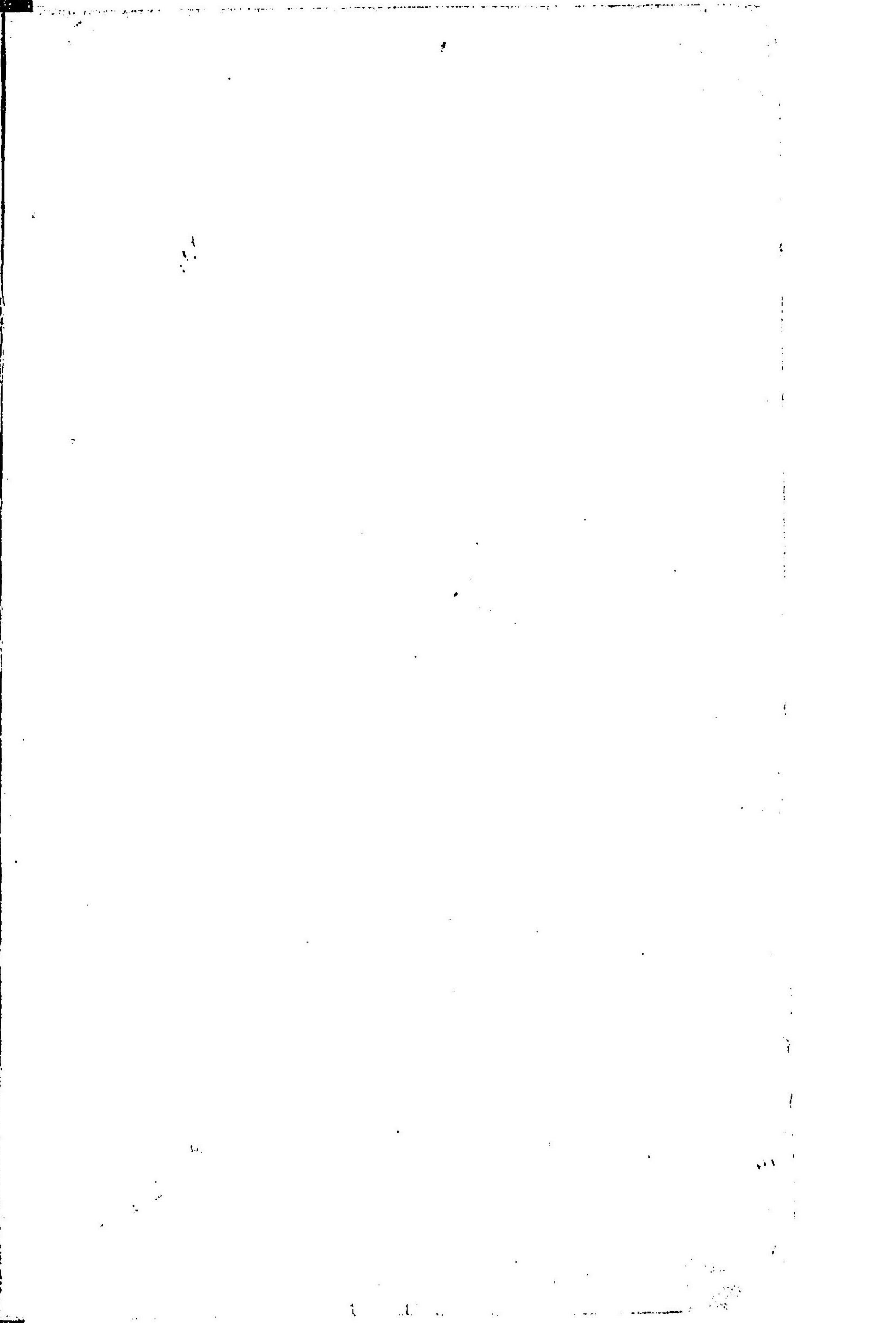
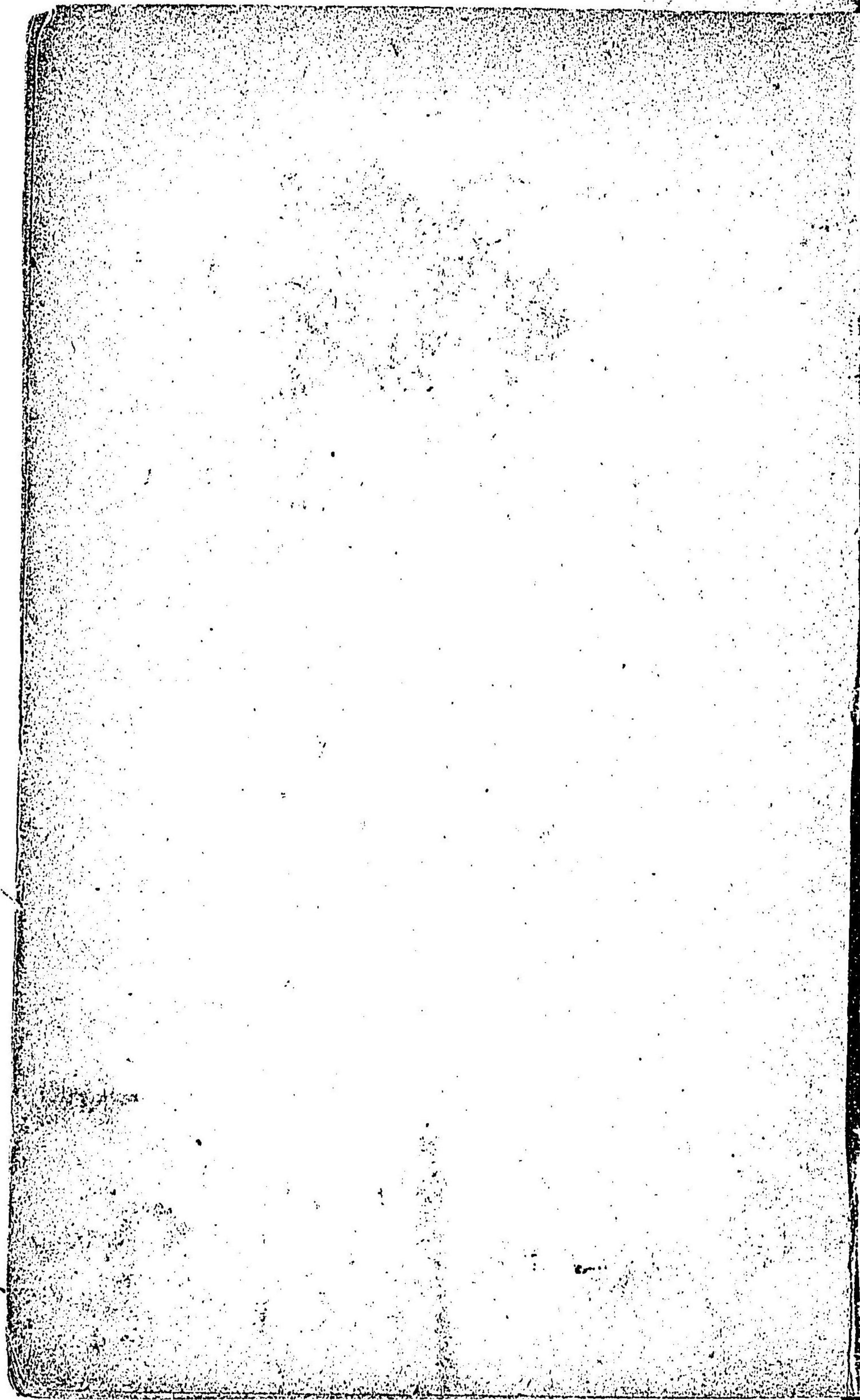
真淵秋山双勇伝

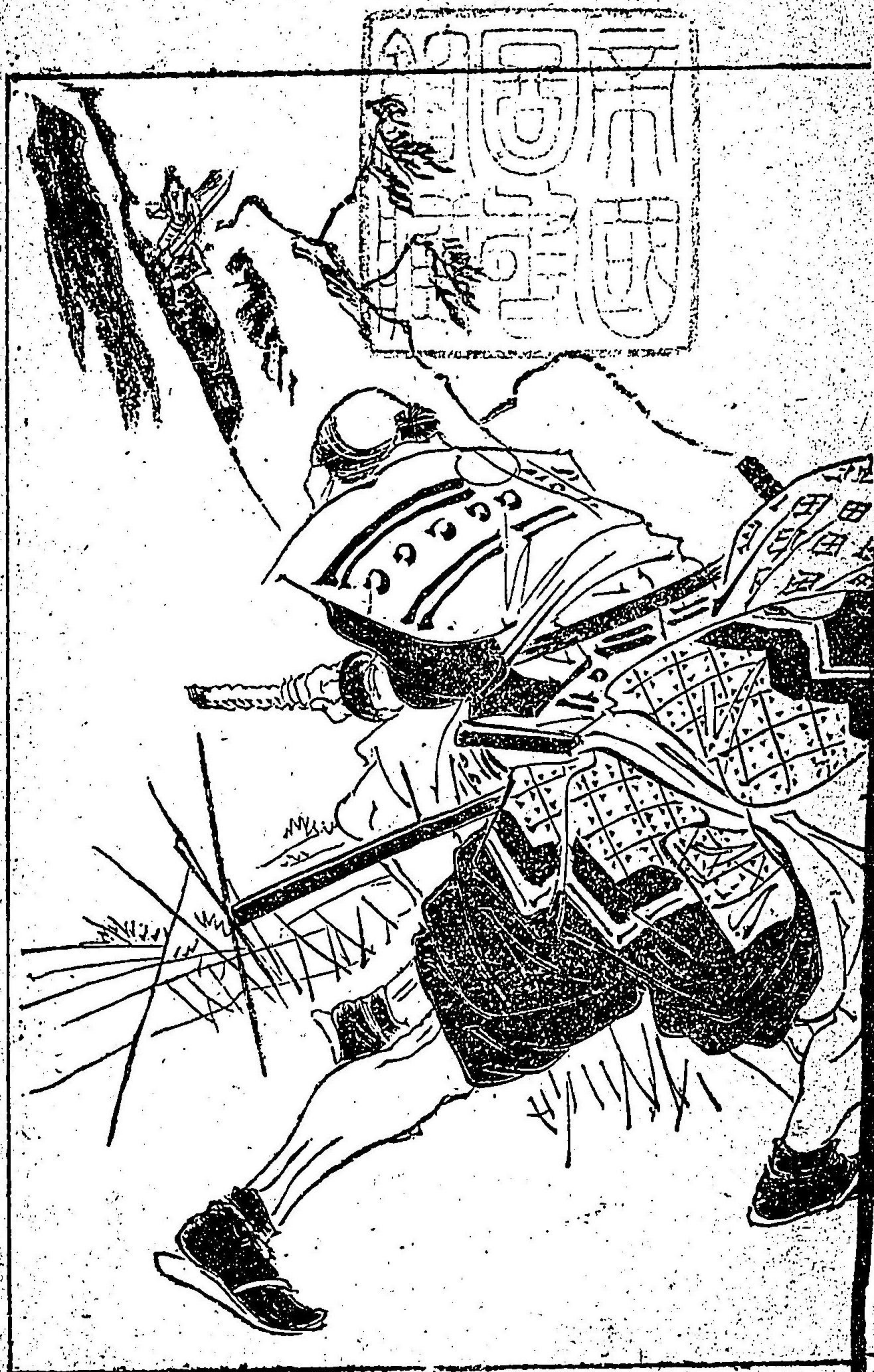
邑井 一 / 講演

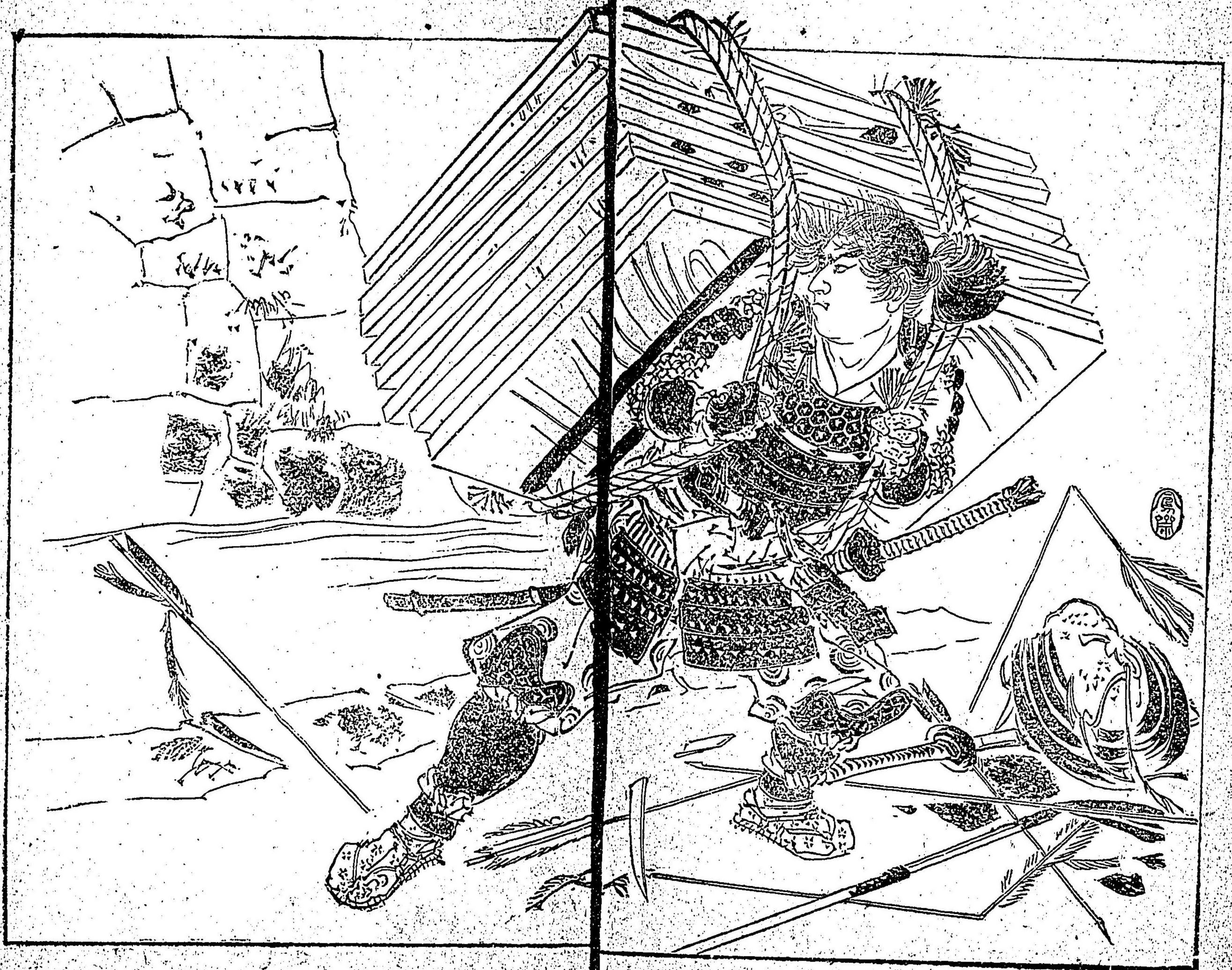
M31

DBS-1589









傳 勇 双 虎 龍



秋 眞 淵 山
双 勇 傳

口 上

邑 井 一 講 演
加 藤 由 太 郎 速 記

諸君も何卒其お積りで御一讀を願ひまする扱て是より本文に
り脚れましたる英雄の傳記には其趣きを異に爲て居り升看客
探つて鑑美堂の御注文に由つて口演をいたし升るもの世にあ
な所あり世にも面白き物語りや今一回が新たに其の事蹟を
を重んじ人倫五常の道を立つると云ふ然も人情もあり又活潑
傳と申す亂國の内にあつて二人の勇士が勇を振ひ義を尊び忠
今回言上をいたし升る物語は世に珍らしき所の眞淵秋山双勇
をい

第一席

龍虎双勇傳

愛に應仁以後天下は麻の如く亂れ英雄蜂の如くに起り君臣は義を忘れて君を弑ひ子は孝を忘れて親を追ひ天下一日に爲て安まるることがありませぬ斯の如くで御座いますから諸國の武士は強きは彼を滅ぼして弱きは是れに従ふと云ふ東西に雌雄を争ひ南北に武威を競ふて東の間も合戦止む時も無く黒雲四方に横行して春は來れども花咲かず世は修羅の街に相成つて萬民塗丹の苦しみを爲し今日と立ち明日と暮して居る内に頭は天文年間でも外が足利將軍義種公の嫡男義冬公と仰しやるお方此方は下世話に云ふ少しく晩作のお方であつて逆も征夷大將軍の職を襲ふべき器量が無い義種公も困つたものとて思召して居る内に斗ら

龍虎双勇傳

すも己れの愛妻の隣に由つて遂に是れを廢滅するの御心に成つて憐れなる哉義冬公遂に阿波國名東郡徳嶋へ追われました其頃阿波國は細川持隆の領地であり升から持隆も主人筋のお方であり升に由つて御氣の毒に思つて義冬を御世話申上げて居りたり然るに持隆の家老三好義形主家を横領をなさんと怒して密かに逆意を企て天文廿一年八月持隆を暗誘して上を弑し細川家の領地を奪つて板野城勝端城右二つの城に立籠つて合戦の手當に及ぶ細川家の忠臣同りく家老一ノ宮長門守は名向郡一ノ宮の城にねつて是れを承り大いに怒つて三好義形を征め去れば是れより右雨城に於て合戦更に止む時がありませぬ……が是れは歴史に載つて居りますから如燕は器いたひて申上げます案下休題さまして愛に其頃同國那賀郡西方村に川田太郎左衛門と云ふ浪人がありました別に是れと云つて營業もありませぬから明暮れ

龍虎双勇傳

山野を駈巡つて鳥や毛物を射探つては是れを町へ賣つて其日の
煙りを立つて居ります。此太郎左衛門に一人の娘がありまして
年は二十八か二十九から花の顔月の眉嬋妍窈窕たる所の美婦人で
あり升持隆より義冬公のお附役に申附けたる但馬の國出石の城
主眞淵丹波守忠光と云へる方日々義冬公に従つて山野を遊び歩
く内不圖此美人を見染めまして明暮れ是を戀慕ふ如何なる英雄
と雖も戀には脆き者であるか忘れんとすれども忘れられず寐て
は夢起さずては現幻るしの如何とも詮方が無いから己れの家來蜂
谷勇之助に媒介の役を申附けました勇之助も困つたものだと思
つたが主命如何とも黙し難く一日西方村の太郎左衛門の家へ
つて來た。軒は傾き屋根は漏り見る陰も無さければ屋でござい
ます。勇之助は頼す……物も女ハイ……と云つて出て來た
のは例の娘なぬいと云ふ勇之助見るに成程美しい女を勇アト

龍虎双勇傳

世には美人もあるものかな實に傾城傾國の装粧ありと申すは是
れか……と思わぬ漏る獨言なぬいはハツと顔に紅葉ぬいとは何
れから出でに成りまじた勇御父上御在宅なれば御意得たい
かぬい御意にございます。勇御父上御在宅なれば御意得たい
ぬい長りました幸ひ今日は在宅いたし居り升るエ、何れから……
勇拙者は但馬の國出石城主眞淵丹波守家來蜂谷勇之助と申す者
折入つて御身の御父上に御意得たいこそがござる宜しく御取次
を願うぬい長りました。ぬい……奥へ參つて
ぬいアソお父上太郎何のである娘……ぬい但馬國出石城主眞淵
丹波守様御家來蜂谷勇之助様と仰ひやられた方が貴郎に御意得た
いと御出でにございます。太郎ホ、一何んの用であるか兎に角御
目に掛つて見たり自ら立つて入口へ來たり太郎是は能う
出でなされました拙者は川田太郎左衛門と申す者でござる何御

龍虎双勇傳

用本は存せん... 勇之助先づ初対面の挨拶が済んで... 勇御免を蒙るも上へ昇つて... 御息女ぬい殿を見染め甚だ耻入つたる次第なる暇あつては夢にさへ見る位い堪難ないに由つて拙者に太郎左衛門殿に願つて御息女をばれ貰ひ申して呉れるやうその主命而し本國には妻あり子あり御貰ひ申した所が妻にいたす理由にも参らざる理由故貴殿には遣らんと仰せあるのは御道理と内心配ながらも主命に由つて據る無く罷り越したのが御道理と内心配ながらも主命に由御息女を召抱へる理由には参るまいか甚だ失禮ではござるか貴殿の爲の武士が一人助かりますこととござるも如何でござる勇之助が太郎左衛門の顔の色を見いゝ申出でました、太郎左

龍虎双勇傳

術門は暫く考へて居りましたが太郎イヤ見る蔭も無な尾葉打枯した浪人の娘荷くも一國一城の主たる者お斯までに思召て下さると云ふは娘の仕合せ拙者の冥賀... とは云へ仰せの如く元は拙者も武士の端馮しても盗泉の水を飲まづ娘の爲に幸ひを得るに申すことは成兼ね去れど丹波殿が斯く迄に思召し下さる者を無形に御断り申すも情けを知ぬ武士とて御さげすみもござらうから拙者に決して御掛ひ下さらなければ娘を差上げませう娘を妾に差出ひて耀榮榮華を爲しアレ見よ那の笠侍... と人に指さるへ差されぬば夫れで宜しい御遠慮無く御連れ下さい。と云ふ實に潔白な者です今の世の中には斯ふ云ふ人は無い少し娘の纏致でも好くつて御覽じろ親は金貨の百万圓も拾つたやうな了見で既に女は氏無くじて乗る玉の興た杯と怪からぬ言葉さへもあり升、然ふ云ふ奴には川田太郎左衛門の黒焼でも飲ましてやりたい

樓勇双虎龍

様な心持ちが爲ます然ふ云ふ餘事は何うでも好い勇之助も太郎
左衛門の心底の清らかなるに感服いたし且大まに悦んで丹波
に云ふ丹波守も大層に悦び丹波然ふ云ふ潔白な人の娘で有たら
那の女も嘸心の清らかなることであらう。猶更に慕はしき其所
で話しが取纏つて在勤中の妾といたしまし丹波守はれぬいを
寵愛するところ一方ならず内にれぬい丹波守の胤を宿してハヤ五
月頃は天文廿一年七月でございませ八月に至つて此騒動が起つ
て當時足利家の右の腕ども頼む細川持隆の爲に弑せられ
持隆の領地は混亂一方ならず義冬も考へたが持隆が弑されて見
れば細川家に世話に成るべき所無い一度中國周防へ立退り見
こどに成りまじた去れば丹波守は固より細川家の家來と云ふ辭
では無い、只已れの忠義から持隆に頼んで御守役を爲て侍に御
添申して居いたことであり升奉ら今周防の國へ立退くと就て是

樓勇双虎龍

等の武士にも夫れ御暇を賜りました由つて丹波守忠光も
己れの本國が案じられますから因州へ立歸ることになりまし
困つたのはねぬいの身の上在勤中に女を拵へたコトヲメ手
束て國へ歸る理由にも行きません家來の奥様の前があるから
據てろ無いから太郎左衛門を招へて丹波此度斯れ折を見て引
本國へ引揚げなければ成らんに就てはねぬいを後に折を見て引
取ればと申して今連れて歸る理由には不可んから氣の毒ではあ
るが當分の内引取つて世話をして下さるるうちに……就てハぬい
も懐胎を爲て居る様子分婉爲して万一男子なれば國表へ送つて
呉れるやうに女子なれば其方孫だと思つて育つて下さるるうちに
……是れは其方に進ぜるのでは無くぬいの手當である云つて
黄金五十枚猶後の証據である云つて天國の一刀を下された太
郎左衛門は畏まりまじた娘を引取つて西方村の住宅へ歸る真

龍虎双勇傳

淵丹波守は因州差して家來を召具し引揚げる扱て此方は太郎左衛門の娘れぬい尊き方のお胤であるから身体を大切に爲て居る内に月満ちて生れたのが男子七夜に至つて名を太郎と付けて太郎左衛門親子の悦びは譬ふるに物無く蝶々花々を育つる内追々に可愛らしく成るのが子供でございます太郎左衛門に實い可愛いの水は水より出で孫は子より出で孫可愛う向ふ脇の痛いのと孫の可愛のは忘れられんと云いますから孫を云ふ者は誰でも可愛い今は太郎左衛門一時も手離すことが出来ません男子と云へば因幡の國へ送らなければ成りませぬから丹波守の許へは女子と披露を爲て育つて居りました内に早いで永祿五年には太郎は十歳と成つた不思議なことに太郎十歳にして力量五十人力に過されて居り升太郎阿母さんぬい何んだい他家では皆んな阿父さん居るけれども私には阿父さんが何故

龍虎双勇傳

無いのだらりぬい太郎と和郎はモ一能く何か分るから云つて聞かせるや和郎の阿父さんと云ふものは因幡出石の城主眞淵丹波守様と云ふお大名仔細あつて斯んな汚ない所には居をが一國一城の主人の前はれ子だから今に立派な御侍に成るのたに由つて決して端た無い眞似をするのじやア無いヨ太郎ヤ一私の阿父さんには侍さんかい然りかい夫れじやア阿母さん私は眞淵太郎と云ふの花ねぬい然るさや和郎は眞淵太郎と云ふのだヨ太じやア是れからは眞淵太郎と私は云ふヨぬいイ、エ然んたしを云つては成りませぬ太郎ナニ云ふヨ是れからは己れ自ら眞淵太郎と名乗つて居りました折々は力量を現はして村人を驚かせることもあるハヤ十六才に相成りました何うも眞淵は好いが太郎と云ふ名が氣に喰わない一ツ名前を改名を爲るや自ら眞淵龍助に改名爲て百姓等を嫌ひ寝食を忘れて武道に心を掛け専ら

龍虎双勇傳

遊獵を好んで祖父の活計を助けて居りました或日のこと太郎左衛門が太郎龍助と龍祖父さん何んでございます太郎今日も獵に出掛けるか龍ハイ参りたいと存じて太郎乃公も一緒に往つて見たいと思ふ龍夫やア結構でござい升ア供いたりませうと母が仕度をして呉れた辨當を携へて兩人家を立出て三ツ名山から段々山端を廻つて今津の峯山の半腹まで來ると小松の茂みから女鹿一疋峯を越して眞一文字に谷間へ飛込まうとする有様に太郎左衛門は屹度眼を注げまして三人張の弓を引絞つて満月の如くヒヨフツと切つて放ちましたる所如何なる手の狂ひであるか矢は鹿の角をかすつて遙かの谷間へ落入りました太郎ア失策つた爲損じたかと二の矢を番へて谷間へ下りたる鹿の様子を見て居ると百丈の谷間より響き來る人の聲太郎ハナナ……と思つて耳を傾ければ甲累卵へじやア無か途方も

龍虎双勇傳

無へ……乙此分じやア助かるか知らん。と聲々に驚く様の手に取る如く聞へましたから太郎左衛門はハツと驚いて太道は過つて人命を絶つたることか如何はせんと思案に暮れたが流石武士、逃隠れはいたりません心を定めて谷間に降り多くの人の立願ぐを覗いて見れば這は如何に過ちとは云ひながら七八才の童子の家來も見ゆる多くの人は水ヨ薬ヨも介抱いたして居りました其甲斐も無くハヤ事切れて如何んも詮すべきやうも無く不圖一人の者が回顧つて見てあれば太郎左衛門が弓矢を携つて茫然と立つて居りますから甲チ、此矢を射たは彼の者だ乙然らた、今此所へ刺つた矢も鴻の霜降羽、那れに携へて居るも鴻の霜降羽は確かに夫れに違ひ無い……ヤ汝は何んの恨みがあつて斯の如くにいたしたか甲何者に頼まれて若君をば射殺せ

龍虎双勇傳

しつ、覺悟をせよと左右より得物を抜いて語掛けました、然るに龍助と共にかを山に出たのではあり升が如何いたしたか山ではぐれて龍助の行衛を見失つて今は一人家來と見ゆら大勢が得物を抜いて左右より手向ひなせば切つて捨てんと身掛へをしたる其時に太郎左衛門は自若と爲り矢を抜くと座太郎誠と各々方々に及んだと云にも非ず、又何れの若君なるや夫さへも知ぬ位全く獵に出此山の半腹より鹿を目掛けて射たる矢過つて其の始末とは云某しが倉忽の振舞、如何に謝するも申譯立難し由つて拙者腹掻切つてお詫ひいたすに由り、此我君の御父へ御身等より宜しく御詫み入る各々去らば……と山刀を抜き放ぎ既に斯ふヨと見へたる時に從者と見ゆる者の内にありました年嵩の一人聲を掛けつゝ、甲アイヤ暫く待たれよ、今身が夫れにて切腹なさは御身一

龍虎双勇傳

人の義理は立んが吾等君前に出で、何んぞ申譯をいたすの道あらん先づ御身を擲め取つて主人に相渡しなば少しは言譯の爲にも成るへしイヤ尋常に腕を廻されヨとのつひさ成らぬ一言に太郎左衛門も膝を打ち太郎ア、吾此場に至つて血迷つたり、成程仰せの如く何れの道にも乗る命懸へ縛り首に爲玉ふてもさらく厭ひはいたさぬは又、細を掛けられヨ各々方の過ちにならざる趣きを御前にて詳かに申述べんと腕を後へ廻し、またしたから從者は立寄つて甲ア、神妙の至りである。と其所で細をば掛けました、切て松田新兵衛の屋敷に於ては下部等の知らせに山つて上を下への大騒動歎き悲しむ聲喧しく松田新兵衛は大まに驚ろきまじりて馬に鞭を加へて飛ぶる如く逸參津の峰山の麓に若し馬を乗せ放して谷へ至り、悴新太郎の死骸を抱起したることにて聲を限り呼ぶと雖も蘇生るべき手術もなく、只其聲は谷間に響いて憐れ

龍虎双勇傳

であり升、良あつて暫く悲歎の涙に掻暮れて居りましたが、新コ
リヤ平内、平ハ、ア、新聞いて益無きことなれども此場の様子
は如何ぞ。と問はれて平内と云へる者頭を遣つて斯れ云々の
次第でござると有し次第を具さに申述べましたから新兵衛は川
田の方を屹度見廻り、新兵衛身であるか予る俸を過つて打つた
人は……川田太郎左衛門積首ままして太郎如何にも面目無き次
第ならぬ。貴殿の御息を手に掛けしは某にして候らふなり、新
ウム……シテ御身は何れの仁なるぞ、太郎拙者は此近郷西方村
に住居いたし獵を其日の業に爲て僅かに世を過す者でござる、先
刻三ヶ峠山の半腹に於て一疋の女鹿を見付け矢を一筋射掛けし
所誤つて其流れ矢の貴殿の若旦那に當たり斯の如くの御落命是
れ全く巧みし事には候まづ拙者お射術未熟なるが故方くの不調
法に相及びて御立腹御愁傷の段は恐れ入り升る、此上は御詫申す

龍虎双勇傳

言葉も更に無之く九牛一毛は拙者が首を刎ねて御息様の靈魂
へ備へ御憤りを御晴しなされて下されヨと低頭平身爲て述べま
した、松田は兩手を組んで暫く思案を爲て居りましたが家來に向
ひ、新平内此仁に無体に繩を掛けたるや、平、イエ無体に繩を掛
けたる次第ではございませぬ彼の者既に切腹し覺悟を極め候故
押止め切腹するは道理なれど今切腹せられては吾々主人に申譯
立難し暫く待たれヨと申せし所、程御道理の次第然らば君前に
て申譯をいたさう御繩を頂戴仕ると申し升故、兎に角大罪人の事
故に繩打ちましてございます。新兵衛此で打合駄き、新然ふであ
らり中々汝等の及ぶ所の者とも見へず……何は兎もあれ永く死
骸を斯ふ爲て置くとは悴の爲に宜しく無い早く屋敷へ引取れヨ
一同ハ、アと家來は五六人で若君の死體を乗物に乗せて屋敷を
差して昇いで行く、新兵衛は太郎左衛門の傍へ立寄り自ら繩を解

龍虎双勇傳

いにて芥打拂つてや、言葉をして正して申すには、新只今家来より一
伍一什を承つたる足下誤つて悴を殺し其言譯に一命を投出だし
其罪を償ふとせらるゝ段甚だ以て神妙なり然し今足下の首を切
りしとて悴が蘇生するにもあらづ強ち足下の罪とばかりは申難
し今ま悴の流矢に當つて落命いたすと申すも即ち何かの約束事
死生命ある人の身の何をか恨み何をか悔みん、壽命ある命と雖も
百歳は保ち難し況んや戦國の世に生るゝ武士の身に於てを、朝
榮暮落定めなき浮世なれば悲んで何かせん、歎へて又由無きまど
足下も必づ、心を痛め玉ふなハヤ、歸宅爲玉へ……と慈愛
に餘る松田が言葉に太郎左衛門はハツ……と平伏し感涙に咽ん
で思へらく、新花も實もある武夫とは是れか、ア、一嗚か悲し
かるらん、に武士の面を立て人を恨みる氣色も無く斯る仁義の接
拶に預るこそこの差りさ日最前切腹めて相果てなは此苦しみはあ

龍虎双勇傳

るまじと慈多生中存命へたを悔む心の潔きさ、何れ劣ぬ心ばい、太
郎左衛門は潜然と泣いて居りましたが漸くに涙を拂ひ太郎誠
有難き君のれ言葉承わらるものかな誓へ助命爲り下さることも中
々に存命へる所存にあらづ然し生害仕るは慈悲の御芳志を受け
ざるに似たり今は只今死を生に替へ佛門に入つて御子息新太郎
様の佛果を吊ひ奉らん是れ万分が一の報謝でござる。云ひつゝ
側へに放出したる山刀をスラリと抜き、ツツ、ツツ、ツツの聲より切り
拂ひ、太郎、サ御覽の如く入道と成りましたが妻子を荷ふ時は誠の
遁世に非づ、是より諸國を修業して身は黒染の破れ衣、樹下石上を
宿と爲て新太郎様の靈を慰め是れまで作りし悪業を消滅させん
と存づれば再會の期も斗り難く、只一ツの御願みは拙者に一人の
孫がござる今年十六歳の幼年ながら身の次は六尺に近く力量人
に勝れ居ります某し是れより廻國仕る時は孫も生涯土民も成つ

龍虎双勇傳

て終らば成りません、如何にも残念に存すれば某し無き後
は恐れ入つたるまごならぬ、貴殿孫を御引取下され、替へ御馬の
口取でも草履取でも厭ひませぬ、何卒御召使ひ下されたく是れ
のみ拙者の願いでござる此一事御聞届け下されたる上からは最
早心に掛る山の端も無く御縁もあらば又拜顔を仕る御名残は盡
さねどもイザ去らば御機嫌克らうと川田太郎左衛門は涙ながらに
松田に別れ何所を當てに當ても無く踏々々々出行さましたら
實に美しき事却説孫の眞淵龍助は如何相成るか第二回に申述ま
せう……

第二席

月日の立つのは早いもので御座います、永祿元年の年もハヤ過
ぎて天正年間になりた茲に阿房の國富岡の城主新開遠江

龍虎双勇傳

守忠之と云へる人は三好の一族でございまして三好豊前守の從
弟に當たる人、義形入道實休も泉州久米田に於て生害いたした後
は嫡男三好長治の勝堀の城にあつて阿波一ヶ國を納ると雖も前
回述前たる如く天文二十一年八月義形細川持隆を弑した位いの
悪逆無道去れば自から政道も正しくありません、忽ち君臣不
和と相成つて家老一の宮長門守と合戦を起り、長門守成助は又も
長治に敵對合戦數度に及ぶと雖も長門守は如何にせん小勢で
ございますから據る無く土佐の國主長曾我部元親に加勢を頼ま
して元親は元來豪氣英邁にして謀計に長じ、折もあれば四國を併
呑なさんと思ふ折柄に二ツ返辭で援兵を諾し、千五百余騎を従ひ
て自ら出軍いたしまし、一の宮長門守大さに悦んで此勢ひに乗
じて勝堀城に押寄せ陣鐘太鼓を叩いて勇しく攻掛ける、城將長治
諸軍を勵まして茲を先途と防ぎ戦ひましたけれども寡は衆に敵

龍虎双勇傳

り難く遂に防戦叶はし弱手より血路を開いて淡州を志して落行
ましましたる所長門守は長門ツレ物共逃すなえさなツと己れ眞ッ
先に進み追掛け来ましたから今の長治絶体絶命ア、一、天なる哉
命ある哉と天を仰いで長息いたし遂に板野郎別宮ヶ浦と申す所
で自殺いたして相果てました時はいつなるぞや天正五年三月二
十八日の事である其後長門守は長曾我部元親の軍と合併を爲て
武備を遠近に振ふと雖も元より長曾我部元親に於ては深切に助
勢をいたしたに非ずして己れの謀略で御座いますすら其後元親
の爲ふ蛙子村の麓下草村と申す所で殺された斯の如く三好
家の一族は月に日に衰へ行くも新開遠江守は名にし負ふ豪傑で
ございますから元親の招きに応ぢ従がはず獨立して城を堅固に
守つて居りました元親の熱々考へるに元親モ一三好の余類も過半
滅亡して手に立つ程の者も無い此上は新開遠江守さへ打滅せ

龍虎双勇傳

ば阿波の國を平げること掌を返すが如し。と一考へました九から
軍勢を出花して前後二回は征めましたが二度ながら物の美事
に打負け、數多の士卒を損じて馬匹の具を捨て來るやうな始末元
親大いに怒り元親言甲斐無き物共か、な、此上は吾自ら出陣に
及んで先府の耻辱を雪むんとあつて自ら三千余騎の大兵を卒さ
て富岡の城へ押寄せ一時に踏破らんと時の聲を上げて楯を突ま
并へ惣勢一度に責掛りました、遠近守は少しも騒がず防戦の備へ
嚴重と態と関の聲をも合さず防ぎ戦ふ体も無く静り返つて扣へ
ました寄手等聲々にヤ、城中は無勢なるが故に防戦叶わづと思
ひ逃失せたりと覺へたり早く堀を埋め堀を破つて乗入れやとお
めき叫んで責掛けましたることにて難無く堀際まで押寄せたる
所に遠近守忠之敵を思ふ儘にお火を寄せ、合圍の狼煙ボーン……
と上がるや否や狭間を開いて鐵砲を二百挺釣べ打ちに雲霞の如

龍虎双勇傳

く群る中へ打掛けました。おら何かは以て堪るべき手負死人數知れず、寄手等は狼藉して引色に成りました。時に城の門八文字に、つ開いて騎馬武者二百餘人大潮の打寄せるが如く、鋒を揃へて討つて出でまじりたから此勢ひふ寄手の者も一同須破の敵の謀略に陥つたり逃げろと退けよ。五十余りも引退く元親大音に元ヤ、せよ呼はるから寄手は是れに氣を得まして茲に兩陣入亂れて切先さより火花を散して半時ばかり打戦つて居りました。時に寄手の内より一騎當千と云はれたる遠山八郎太刀を真ッ向に振舞ひて群る敵を切倒し難倒し怒ちの内にて二十七騎程を倒しました。猶も猛虎の如き勢ひを現はして城兵を追退け馬上に大音擧げて八郎ヤト、遠からん者は音にも聞け近くは寄つて目にも見よ。吾れこそは長曾我部お身に於て遠山八郎と云ふ者なり某しが

龍虎双勇傳

太刀先きに掛りて死す者ば勇士の譽れ子孫に傳はり未來は必ず成佛すること疑ひ無し。我と思はん者共はイデヤ來たれと。廣言を吐き眼を配つて八方へ駈惱す。故餘りの事に見兼ねたるが城内の勇士松田新兵衛乗出で、松天晴れ能き敵御參われと。鎧を捨てつて渡り合ひ双方劣らぬ勇士と勇士、二十有余合火花を散して戦ひました。が更に勝負を見ませぬ。懸ての事に新兵衛は年老ひたる故であるか少しく疲れを催して八郎の切先に薙立てられタジ、と後の方へ退つて來る去れば松田の鎧先き四度路になつて見へたる時に松田新兵衛の馬の口を取つたるは龍助と云ふ是れ別人ならぬ。出石城主眞淵丹波守忠光の胤たぬいの悴川田太郎左衛門の孫であり升、令主人の危きを見て日頃の恩を報ふは此所であらうと透を伺ひ、麻寄つて遠山が乗りたる馬の四足をムズと攔み、身体を馬の腹の下へ入れ力量に任して差上げました。おら八郎

龍虎双勇傳

は 松アッ……とばかりに驚るいて居る寄手の人々も只アレヨ
と云ふばかり龍助充分に差し上げたることよて龍斯ふ爲
て呉れうと群がる敵のなかへ投げ入れましたさしも剛勇の越山
八郎ではございませう大地へどッとはかりに落ちて盡めくどし
ろを松田新兵衛駆け寄つて起こしも立てつ突き伏せて終に首を
擧げました龍助は隙かさづ遠山の太刀を奪つて右往左往に逃る
敵を追掛け追詰め五六騎を暫時の内切伏せました寄手の者も
呆れ果て一同何んぞ云ふ強ひ奴であらりと癖をまじりて吾れ先き
にと逃去る故元親も無念とは思ひましたたが實に真淵龍助の今日の
も無く一先づ丈六寺まで引擧げましたたが實に真淵龍助の今日の
働きは敵も味方も恐怖しない者は一人も無い借ても富岡の城に
あつては新開遠江守忠行は元親の大軍を追散して家の子郎黨を
召集め勝祝ひとひして酒宴を催し夫れ

龍虎双勇傳

られまじりた其時遠江守は松田新兵衛に打向ひ遠江昨日敵の中よ
り廣言吐いて躍り出で味方を惱し取ふ時に其方會釋もなく馳向
ひ鎧を合して暫く戦ひ既に危く見へたる時に汝の馬前より駆出
で遠山の乗馬の足を掴み人馬ぐるみ差上げて敵中へ投込んたる
其勢ひに恐れ敵も引色を見せたり夫れ迄は勝誇つて居つたる
なれど那の時引色を見せ退いたるは是れ全く郎等の働きたる
る所なり急ぎ其者を是れへ呼出たせヨ厚く恩賞を與へんと存づ
る新ハア遣は有難き仕合せ急ぎ呼出たすでござらうと其所
で仲間龍助を召出だしました龍助は只恐れ道か末席に平伏い
たす忠之是れを御覽せられに身の丈け高く筋骨逞しく見ぬ唐
土の樊籠も斯く大あらんと思われ天晴れ珍らしき勇士でござ
いますから遠江守殿大まに御褒めなされ遠江ア、し天晴れ大丈
夫未頼母しき者であると新地百石の墨付に太刀具足を下し賜は

龍虎双勇傳

りまじりた龍助は只感涙に咽んで平伏いたすのみ遠江コリヤ龍助
と申すか龍ハ、ア遠江以來は我幕下に屬して犬馬の勢を盡さ
れて然るべし龍道は有難き御誕を承はるものかな敷なりませ
ぬ拙者を斯く迄厚く御褒めを頂くと申すは勿体無いと申そう
添け無いと申そりか此上は一命は鴻毛より軽く君の爲に大馬の
勢を盡すでございませう遠江ヲ、是分であるオヨ、扱て此頃は
國に縦横する諸將は勇士とさへあれは身分の輕重を論せず貴賤
を分たす恰も鴻魚の水を慕ふが如く既に對の玄徳は孔明を慕ふ
て三度草庵を訪れたと云ふ丁度左の如く此當時ハ亂國でありま
した今遠江守も龍助の勇を慕つて斯く町重に取扱うのでござい
ます遠江守殿松田新兵衛に向つて遠江ヤヨ新兵衛斯る豪傑を汝
は何故中間に召使うが正逆に人を見るの智無き汝にもあらざる

龍虎双勇傳

に……松田新兵衛莞爾笑つて、吾我君其御不審は御道理には候
得共龍助儀は拙者の恩願譜代の家來にては無之く仔細わつて先
年召抱へ置さ候所力量抜群にて主に仕ふるの心厚く君に勤めて
有難きことながら少しく心願有之り仕官を望み申さざる堅く斷
り置さ候故等に爲て過す中今度の働ま上覽に入り有難き仕合
せ然るに只今私に申すには君恩を無げにするは恐れ入り候間一
且は御受仕れと逆も御墨付と太刀は頂戴いたすことは成難く折
を見て御戻し下されヨとの言葉拙者とも彼の心のある所を知
らず由つて君より直々に彼を御談じ下されたく此段偏に願ひ奉
る。遠江守聞いて不審く思ひ遠江コリヤ龍助……龍ハア遠江只
今松田新兵衛より承まはるに一旦予に向つて忠を盡すと云ひな
がら亦々録と褒美の品は受けられぬと申す由甚た以て訝しく如

龍虎双勇傳

何の次第であるか遠慮無く申せ百石にて不足なれば少くも加増いたすであらう龍思ひも寄らぬ仰せかな数ならぬ私共へ御褒美の御詞さへ過分の儀に存し奉るに其上太刀具足及び百石の御墨附を賜はり何ぞて不足を申しませうや有難さ餘つて君の仰せ背くは最を勿体無くも御受はいたし候得共拙者儀は祖父の遺言に由つて松田新兵衛の爲に主人と相頼み居り候故他より御賞に預る所以無し先刻君の爲に犬馬の勞を取らんと申せしは松田殿へ忠を盡すことにて松田殿へ忠を盡せば則ち御前様へ忠を盡すも同じことかと存じ候恐れながら言上仕りまして決て敢てならぬ身とは云へ舌を二枚に使ひたる次第には之無く昨日の合戦に聊か働ま候は主人松田殿の危難を救はん爲でござる全くも御褒美なれば主人新兵衛へ下し置かるゝや先刻は餘りの嬉し

龍虎双勇傳

さ恐ろしさに耻かひながら願動して御受け仕りまじりたか大殿宜しく御賢察願はしく存じ奉る。と辨舌滔々を爲て述べました遠江守是を聞て遠ヲいみじくも申したり重ねて天晴れの心底然し其方は松田の譜代の臣にあらざる由然らば松田の承知の上は予に仕へて俱に忠義を盡し美名を末世に残しなば俱に名を擧ぐる道理なり又一且受けたる賞品を再び返すは無禮であらう何うじや龍助……龍助此時兩眼に涙を浮べて龍誠に御深切の其御詞を辭退申すも恐れあり然らば私儀が祖父の遺言を守らる云われを恐れながら詳かに言上仕りませう大殿の御前も憚からず申上ぐるは恐れ多き次第なりと雖も又止を得ざる事でもござる暫時御聞取下さるべし抑も某年の父は眞淵丹波守忠光と申して但馬出石の城主でござい舛先年平島義冬公に従ひ阿波の國に下つて細川枝隆公に仕へし砌り拙者の母へ手が付きましたる次第其後

傳勇双虎龍

義冬公は周防の國へ立退ま玉ふ父の丹波守にも御暇を賜わり東
國但馬へ立歸る折から僕は母の胎内にあつたる時にて候去れば
丹波守母を祖父太左衛門に預け置ましが歸りし其跡にて僕生
れて此年月祖父の手に養育に預り斯の如く成長仕りました然る
所先ツ年太郎左衛門僕と共に三ツ峰山へ獵に出で互ひに獵に心
を奪はれ右と左にりはぐれ祖父は一人で次第と山奥に心
り不圖一疋の女鹿を認め是を打たんとして過つて松田殿の一子
を射殺し祖父太郎左衛門は死命にも及ぶべきの所新兵衛殿の情
けに由つて生を保ち故に祖父呉れくも吾等に遺訓して祖父が
活命ぬ恩を報ずるには松田殿に従つて忠義を盡し松田殿の馬前
にて忠死をなすが道ぞかりと呉れくも申付けて祖父太郎左衛
門は松田殿の子息新太郎殿の墓提を弔わん其爲に身は雲水の僧
と成つて何所にも無く安脚に立出でまじたのは永祿六年秋七月

傳勇双虎龍

のまこであり升拙者は右の次第でござるから祖父の命に由つて
松田殿に従ひ主家のあらん限りは外に主人を求むることの出来
難きは斯の如くの理由あつてのことサ斯と申上げましたる上か
らは大殿の御情けを持つて御宥免の御沙汰偏に願ひ奉る。と涙を
流して赤心面に現われ申述べましたる時に満場水を打つたる如
く涙に暮れぬ者は無し嗚呼龍助の如きは眞に得難き義士でござ
います………

第三席

偕ても長曾我部宮内少輔元親は軍備おさく怠り無く勢ひに乗
じて富岡の城を再三再四征ると雖も如何にせん富岡の城は後
峨々たる山脈櫛比し前面は渺々たる海に接し朝暮は雲霞起りて
朦朧とりて城の動靜を伺ひ見ること能わづ遙か天に城頭の龍を

龍虎双勇傳

見るのみ、恰も龍宮に髣髴たる所でありますから地の理に叶ふた
名城でございませう只夫れのみならず城將新開遠江守下を感むこ
と深く去れば君臣一致して知謀剛勇の士多く居りますから自然
と能く防戦の策に長じ自若として動かす由つて元親再三敗走し
て士卒を多く失ひ今は詮方盡きて一先づ戎山の陣營を立退かん
と思ひまして久武備後守に殿を甲付け自分は本國土佐の國を差
して立歸りまじした、備後の守は元親の命を受けて軍議に及び一ノ
宮長門守へ會合を申送りまじした、長門守承知に及んで野中六郎右
衛門西寺賢齋を遣わじした右兩人直様兵を束て戎山の城へ來たる
時に久武備後守は言葉と正して元親の申遣したる趣意を物語り
備後去て斯の如く次第でござるから先づ浮龜の城を征落さん
と思ふと雖も中々容易く落城はいたすまい、方ら責にいたしたらん
には士卒を損ふこと敷知れず是に由つて何卒一旦和睦を爲て其

龍虎双勇傳

上に事を謀らんと存づるが誰かある味方の爲を思ひ君恩を思ふ
て和睦の勞を取る者は無心と満座を見渡した時に吾行かんと云
ふ者も無く皆差俯向いてシインと水を打つたるとどくであり升
折しも一の宮長門守の臣西寺賢齋進み出で、賢恐れながら拙
者不肖短才さる大切なる御用相勤むるの器量無しと雖も自ら謙
遜して退くべきの所に非ず、速かに富岡の城に趣き和睦の勞は鳴
呼ケ間敷くも執るでござらう。と大膽にも言出でました、備後大
に悦こんで備ヲ、流石は一の宮方に此人ありと聞へたる西寺
氏能くも申出でられたり、然らば御苦勞なから彼地へ渡へて和睦
の勞を取られよかじ、賢畏まつておそれる首尾克く取纏めて長會
我部への御奉公仕らう。と立派に言切つて急ぎ其用意に及ばれ
ました、切て賢齋は其翌日戎山の陣營を出立に及ばれましたが富
岡の城に到り外から様子を見ると實に大した城です、賢此り

龍虎双勇傳

ア成程抜くには骨が折れるなら中々の名城だ。心中大いに感
じて大手に至り賢頼ひくソドン。城兵はマア當分戰
さもあるまい。と少しく安心を爲て居る所へ今門を頻りに叩く奴
があるから何者かと思つて門へ近く差寄り兵何者ぞ……
「長曾我部元親の使者西寺賢齋君命に由つて罷り出でた早々御開
門を願う兵なんと云つて門を明けさして急に攻込まうなんて
其様な甘口な計器に載るものか白痴野郎……と土手の上へ昇つ
て様子を見る。成程從者を僅た三人ひつゝア連れて居ない大
まな坊師武者。兵イヤ大膽な奴があつたものかな……只今取次ぐ
から少し待つしやれ。と待たして置いて城將遠江守に告げました
から新開も妙に思つて遠江何んに来たんだらう。松田新兵衛と
申す前回述べたる仁義に富んだ名將是を承つて甲左様サ多分
は和睦かも知れん。遠近成程然よかも知れん此方へ通せ……。雜兵

龍虎双勇傳

が直ぐに開門に及んで兵此方へ通らつしやい。賢早速の開門
辱けなく存する。と西寺賢齋に於ては黒糸威しの鎧鉢形打つた。銀
龍頭の兜を猪首に着なして萌黄緞子に浪に千鳥の高縫本ひた
る陣羽織を着し左も立派な拵拵であり升此頃は戦國であり升か
ら寝る間も武器を身に着けて居つたので斯を考へると當時太平
の世の中に生れた看客さんは實に御仕合せであります。皆賢
齋は最も立派やかなる有様に從者を連れ從容として案内に從
ひ次第に本丸に近づく如何なる様子であるかと西寺が左右
に眼を配へて見るに諸將より雜兵に至る迄軍規整々としていか
あしく鐵砲弓矢銃刀等ブツと立並べたるは身の毛も竦立つば
かりであり升願て城内客殿へ通し暫く相待つて居る所へ静々と
立出でました。遠江守双方互ひに挨拶済んで遠江扱て能くお出
で下された。近頃元親威を近國に振ひ頼りに他領を犯して吾等と

龍虎双勇傳

小兒の如くに悔り理不盡に民家を亂暴致し當城に押寄せて城下を騒がし傍若無人の振舞なるが何用あつてれ出でありしか疾くは餘の儀にあらす元親熱々考ふるに今天下麻の如くに亂れて四方八面に兵起り弱を倒れ強は制し親子と雖も相せめぐの今日に至つては人の勞れを見て是れを倒し隙を見て是を奪わんとする慾心の者又從つて多く去れば一鳩の内にあつて及を交へ恨み敵を共に滅ぼすの時に非ず四國相和して協心努力なし他より征來る注ぎまして只今迄は辱公に敵對いたり居りましたが是より水魚の交りを結ばんと心の山つて和睦の爲に參上仕りたる所でございます且又只今迄斯の如く相成りしと雖も元來元親より御當家に對して遺恨は無く然るに當城に弓を引しことは全く一の宮長門守

龍虎双勇傳

が附めし理由にして元親の心より起りたる者にあらず元親に於て是も御當家を怨むの所謂無ければ速かに和睦御承知下された此儀願ひ奉る。と述べたる時に新開遠江守はカラ〜と打笑ひ遠江に黙れ巧言令色鮮し仁とは汝の事か汝言葉を巧み吾を謀略の穴に落さんとする不屈き者今元親は其威四國に振ふて二度々三度の敗軍に恐れをなして吾に和睦を乞ふべき者に非ず是れ必ず巧みのあること早々立戻つて新開和睦不承知の旨を申せし……賢齊願首して賢道は御叱りせ御道理のことながら何とて巧みあつて拙者斯ること申りし參らうと己の心の恥づること無ければこそ敵の陣營に恐ろれ氣も無く來たりしに非らずと尤も此和議一朝一夕の意味にあらす斯く成る上は據どころ無う某しが思ふ所詳らかに言上仕らん抑々長門守が元親に進めし常に三好家の衰ふるを憂へ己れの武勇拙きが故に元親に詣り

龍虎双勇傳

先には長治を打滅してす功を立て、今又新開家を打倒さば三好の一族盡く跡を絶ち、四國平定の基ひなりと元親に向つて言葉を巧んで頻りに無道を勧めましたから元親も前後の考へ無く早速軍馬を差向けし所再度の敗軍、最早此上は子房孫吳の智謀を施すと雖も新開家には及ばずと考へいふかしく思ふ折から長門守は新開家と最も親しき一門なれば必ず反間の謀略あらん杯と密かに語る者ありし故元親考ふるに兼て長門守に預け置まじ池田備前守に謀計を申し合め置き扱て元親より表向きの宮の城に使者を下して備前守に尋ねたき趣きは去る廿八日富岡の城を攻し砌り組ぞ救わざるのみならず敵に後を見せ剩へ旗本勢に討るゝ時何んが故に總敗軍と成つて面目を失ひ候は備前守が億病の所業を爲りて元親の意に非づと是れに由つて侍大將を召放し備前守に従

龍虎双勇傳

ふ所の組士は同役野中三郎右衛門に預けらる、備前守無念の顔色にて長門守を密かに招いて溜息を吐て申さるゝには貴殿には格別の入魂なる故我心底を打明け申し去る廿八日の城責めに惣敗軍せしは我等一人の罪なりとあつて侍大將の職を召放さるゝ法と甚だ残念至極の儀なり最早武道を立てるは今日限りのことと思へば今更其名残り惜まるゝなり元親の幕下なれど彼れは扶助を末に受けず、然るに輕々しく取扱ふこそ重々無念至極、生涯忘れ難きの遺恨でござると云われまじ、長門守は此言葉を謀略とは露知れず標々に備前守の無念を慰め、拙者も實はと密かに已れが野心あるこそは誠に愚かの次第でございます、シテ此長門守成功の野心

龍虎双勇傳

あさするとは是れ所謂兩虎を争はしめて勞れし所を喰はんの
巧みなり何んぞ成助如きに斗はれて數代連綿たる名家を深
んこと最と口惜ま次第に候はす成助は反復多き者にして虎の
子を養ふに難し、かるが故に元親平生心を許さず池田と野中を
附役と爲て附置さし所今成助が野心あること明白に現はれし故
希くば尊公様元親と和睦し玉は供に心を合はせ長門守を滅ぼ
ひて三好家の危々を救ひ玉ひ、元親は安堵の思ひを仕るべしと理
を盡して蘇長の辨を振ひ浴々と述べました、遠江守莞爾笑つて
遠江足下の申す所一理なきにしも非ずと雖も今元親は其勢ひ四
國ふ冠たり、當國は勿論伊豫讃岐をも切從へて其勢ひ破竹の如く
盛んなり如何に長門守元親を掌中に弄ぶと雖も今は彼れ漸く軍
勢とて千騎に過ぎず、元親出馬無くとも兩國へ下知を傳へ、軍勢を
催促して一の宮を攻る時は盤若を以て鶏卵を碎くより易からん

龍虎双勇傳

然るに小身微力の某しを語り共長門守を討滅せん申さる
ふこと甚だ以て心得難し。賢齋ぬからぬ面持ちにて又曰く
御不審は御道理には候得共如何にも長門守を征むるに他の合
を頼むに及ばねども只今も申上く通り長門守に謀られて兩家既
に滅亡に至らんとせし所未だ武運の盡せぬ所か長門守の野心現
はれ元親自力を以て討つ時は却つて積餘に成り、餘無きに似たり
故に當城へ合休して長門守を討ち亡しなば幸ひ尊公様にも長治
の仇をも報ひ且は元親にも宿意を残さず永く水魚の交りを結ぶ
の基ひと相成らん、實元親も四國併呑の野心無きにあられど流
石は名將仁義を破つて約を變る可如き所業は無し此儀疑ひ玉ふ
こそ無く和睦の儀御承知なされて下され。己可主人を悪しむ
に云ひつゝ額より汗を流して述べましたから遠江守も賢齋の巧
みし言葉に惑はされ、無く和睦承知の由漸く返答に及びまし

龍虎双勇標

た、西寺賢齋は爲濟したりと心中に微笑み賢早迷の御承知悉け
無く御願申上げ奉る、斯成る上は主人にも申聞せ早く安堵いたさ
せたく御暇頂戴仕る。と暇を告げて立歸りましたが實に三寸の舌
頭能く英雄と迷はし得ると云ふ賢齋も中々の才者扱て是れより
如何なる手段を以て新開遠江守が苦しめられるか鳥渡一ツ服い
たして後回に申上げます。

第四席

西寺賢齋は首尾能く新開遠江守を三寸の舌頭で説落して心中大
きに悦び直様戎山の陣所へ立歸りまして遠江守和睦承知の趣
を告げましたから久武備後守大まに悦び其盡力を厚く謝して
備後然らば善は急げと申すから其計略の漏れざる内に早く事を
謀らん。と改めて書面を認め使者を以て富岡の城へ遣はしました

龍虎双勇標

遠江守開きて見ると

昨日西寺賢齋を以て申入れ候和睦の儀早速御承知下され欣
喜雀躍の至りに不堪厚く奉謝候就ては明日貴面を得軍議御
協談申度く儀有之候間甚だ御足勞ながら明朝本庄村丈天寺
迄御光臨奉仰候御面會の上萬縷申可述候恐惶謹言

月 日

長我曾我部元親代理

久武備後守再拜

新開遠江守殿

とじてある、新開遠江守も智慮深き英雄ではあり升る新く迄我を
欺くとは存じませんから

拜復御書面の儀委細承知仕候然る上は明朝無相違く本庄村
丈六寺迄出張可申く其節萬々可申述候

月 日

新開遠江守

龍虎双勇傳

て返辭を認め使者に渡した、使者は立歸つて備後守に是を渡し
ました大いに悦んで急ぎ其用意をなさんと密に屈竟の武士を撰
み斯く謀事を合めて其夜忍びに凡そ百人ばかり丈六寺の境
内に忍び入り、致蔭又は立樹の繁みへ隠れて合圖を待つて一度に
ドツと起らうといふ扱ても其翌朝に至り開れば備前守は夜の引
明けに丈六寺に來つて今やと相待つ内程無く新開遠江守忠
之家來僅かに三十人を召連れ入り來りましたから久武備後守出
向ひ先づ方丈に招じて挨拶終りて頓て山海の珍味を夫れへ押並
べ大いに忠之を饗應いたしました、遠江守も意外の饗應に數杯の
酒を傾け好い心持りに成りまじたから少しく酔を覺さんと座を
立つて椽側に出で庭の草木を打眺め、遠江ア、好い景色であるワ
イ。と餘念も無き折からに椽の下より突然現はれ出でましたは久

龍虎双勇傳

武の組下に當時勇士の間へある横山源兵衛と云へる者大刀、スラ
りも抜放つて遠江守の後より源、エイ……矢聲諸共肩先き目掛
けて水も溜らず切下げました遠江守は不意の深傷にアツとも
云はずスツとも云はず倒れ、息は相果てる、斯る豪傑も暗夜
の礫は拒ぎ難く實に備後守の計ひは卑怯と云はんか卑劣と云は
んか、源兵衛は爲てやつたりと莞爾笑つて立上つた折しもあれ此
物音に驚いて松田新兵衛馳來たり此体を見て大いに驚き且は怒
り新己れ主人の敵愾念せよと云ふより早く持つたる刀を抜く
手も見せず横山目掛けて打つて掛りまじた源心得たりと源兵
衛跡へ飛退つて身構ひに及びましたがなぞか新兵衛に及ばん
と二三合打戦つて居りまじた内終りに新兵衛の爲に源兵衛袈裟掛
けに切倒された、新兵衛大音聲に新新開遠江守家來の物共に申
開かず我主人は元親の如計に陥り只今御落命なり目差す敵は久

龍虎双勇傳

武備後守、忠を重んずる者共は目差つ敵を打取つて美事討死いたすべし。と呼はり、奥を目差して切込みました。此時敵陣に隠れ居たる若武者二十人ばかり一聲に踊り出で、我打取つて功名せん。新兵術の跡を追馳け四方から押取圍んで戦ひました。松田は名に負ふ勇士でございますから獅々奮迅の怒りを爲り、縦横無盡に切拂ひ當るを幸ひ暫時の間に七八人を其所へ切伏せました。から其勢ひに恐れ、近寄る者も無し、新開の家來の者は主人討たれたりと聞くと、より一度は驚きまじたが今は誰の爲に命を惜まらんや腕を限り、切つて切捲り死人の山を築いて、深く主人の供腹搔切らんと拔進れ、群敵の中に切込んで、今迄續經の聲に肅然たる丈六寺の方丈も忽ち變る修羅の街血沙は流れて川の聲如く死骸は積んで岳の如く火花を散して戦ひました。當今でも丈六寺の廻り廊下の天井板に張つてあり、升りて參詣人に見せす。

龍虎双勇傳

が血戦いたした印しには手足の形の血痕が只今でも現然と残つて居ります。看客諸君れ序でもあつたら延つて御見物をなさう。決て虚言は申しません、切ても松田新兵術は鐘鬼の如き勢ひにて己れ久武を討取らんと方丈の椽側に出で眼を配つて敵を撰み討にせん。待掛けたり、今日供爲て来りたる真淵龍助も一度は事の意外に驚きまじたが主人の身の上心許無しと思ひ、此所を彼所と尋ねる内伏勢左右より一同ソレ逃かすた。と切つて出でました。龍助大いに怒り、龍借き奴原……と右と左りへ取つて投げ棄て用意の十文字の槍を捻つて逃げ行く敵を追詰め、方丈の方へ駆け行きました。松田新兵術聲を掛け、新ヲ、龍助なるか平生なむら勇ましき其働も然し逃る敵を追ふこと勿れ。龍ヲ、御主人如何あらんと先刻より心配いたして尋ぬ居りました。お扱ては御無事でございまじたか。と嬉し涙をポロリと落して新兵術の顔を

傳勇双虎龍

見上げ兩手を突て居られたり、新兵衛も俱に落涙し、斬つて汝に逢ひて是れ今生の遺言をばさんと思ふ折からに主従の縁未だ盡さず對面することの悦ばしや近う進め龍ハ、ア、新此リヤ龍助其方は早く富岡の本城に立歸り此大變を告げ知らせヨ元親の大軍時日と移さず押寄るは必なり去れば所詮防戦は叶ふまじ由つて此上は松壽君を助け参らせ汝は何國へなりとも立除まじ護し方れヨ是れ汝ならでは外に勤むる者も無し富岡の城中にも名將なきにあらねども反腹容易き人心頗むに足らぬ人々のみ勤めよや龍助と云ひ棄て與の方を差して既入らんとする龍助は太刀の錯を確乎と握り龍アイヤ我君暫く御待ち候へ仰せの趣き畏まり奉り去りなむら此儀は直參の人々へ仰せられたし今日を限りも御覺悟の休を見受り故下僕も兼て申上候通り生死を君と俱にせヨと祖父の遺言を守りなから斯る危急の場を見棄て富岡

傳勇双虎龍

へ歸りなば是れまで盡せし儘かの忠義も皆水の泡と消失せん君の仰せを背くにはあらざれども此儀はかりは他人に御命じ被下たく拙者は君の御供爲て今日此所に一命を棄たらざる此儀御聞届け下されたしと赤心面に現はれて述べました松田新兵衛曰く新汝が申す所道理ながら斯く伏勢を持つて取巻られたる以上は中々尋常の者が敵の圍みを破つて此一大事を味方の本城へ告げることも思ひも寄らず汝何卒圍みを助助け富岡の城へ急を告げ善後の策を施らり呉れよ吾も共に死するより忠義は最う原からん茲の道理を考へて我命に従へヨ吾は君の傍にありながらヲメ、敵の奸計に陥つて君を失ひ奉ること其罪須彌浴海より深く何面目あつて本城の諸將に見へんや定めし主君は無念骨髄に徹して存すらん是より吾は黄泉の御供して泉下に御籠を申上げんと存す、汝吾に成變り幼君御二方を助け参らせヨ御一門の

龍虎双勇傳

内にて三好山城守笑殿殿こそ信義を守り御方なれば今は織田信長公に從つて上方にあり時節を待つて此人に万事を頼むべし思へは不思議の縁にて主従と成り講代の者に勝りし所の汝が精忠死すとも決して忘ればせし吾等空しく成りし後は永年の施主汝より外に無し是れは後の遺物であるぞヨ納めて置けと差添スラリと抜き放ち髪を毛を押し切つて其差添と共に龍助に渡ししに頼むれ龍助受取り押し頂き龍ハツとばかりに平伏して悲歎の涙に搔かれて居りましたか實に主従の永き別れ思ひやられて憐れまじり此時又も又敵の取巻く聲の聞へまじりたから松田新兵衛吃度奥を目差して駈入りたり跡に龍助は暫しか程は涙に暮れて居り品を取纏めて居る所へ敵の大勢夫れへ來つて龍助を見るより

龍虎双勇傳

一同ツレ逃すなど切つて掛るを龍助龍心得たりと方丈の正面に飾りある長サ七尺もあらんと云ふ塔婆を取るより早く近寄る敵を微塵になさんと横縦十文字に龍車の如く振廻す流石の敵も此勢ひに恐れけんタシと跡に退がり秋の木の葉の散るが如く皆八方に逃散りました龍助はホツモ一息龍此暇に片時も早く城の中へ此大變を注進せん寺内を出でる後よりは二十人ばかりの者が屏風填を立つたる如く半弓を井べてビヒクと射立てる龍助は素肌にて當惑を爲ながら飛來る矢を切拂ひと漸うと大門の所まで逃げて來ると扉が開いて居り升からは是れ風竟の樞板なりと兩手を掛けてミヤと扉を開いて居り折れ夫れを背に置ひて矢を防ぎながら勇々しくも毘で行きけり敵方の若者はれを見て膽を冷しアレ古今無双の勇者かなと追掛けもせず呆氣に取られて見て居りました此方は龍助扉を笈ひなが

龍虎双勇傳

五十四
ら中田村まで来たりましたが最早から追来る敵もありません
から今は心易しと往還の道傍にある大松に扉を立て掛けてホッそ
一息吐き不圖思ひ付いたるから腰に差したる矢立を出たり彼の
扉に大書して曰く

元親の軍勢等能く聞け此上富岡の城へ寄来る奴は忽ち生首
を引抜かん首級の不用なる者は速かに来たれ我腕力の程見
せ呉れん呵々

松田新兵衛

真淵龍助

斯く大書して急ぎ富岡の城へ馳歸りました却説丈六寺にては新
開遠近守を始め松田新兵衛以下二十四人の従者討死を遂げ惜い
かな武勇の名家も元親が謀略に掛つて終に滅亡いたりました是
れ時天正九年十月十六日の事であり升武丈六寺と云ふ寺は龍

龍虎双勇傳

山と申して阿彼の國勝浦郡多字良村にあり升宗旨は曹洞宗にし
て四國では有名の巨刹寺領も五千石あつて戦國の新には数々此
所を以て陳營といたりました山内松杉茂築つて備若たり山門に
掲げたる所の象額は唐に有名なる蕪菟呂の真筆でございます寶
物は色々あり升が先づ淳和方佑を第一としてなだるる寶物あり
ります長曾我部の乱軍後大いに衰へましたが後元禄年間天慶和
尚此所にあつて中道の開基を立て道性堅固智識卓絶神通法力を
修して諸邪惡魔を降伏せしめて衆民の危難を救ひ災厄を免れし
めて佛果を得尊せられて大いに功德を垂れ諸人の敬信を受けて
巨宏の堂宇を再建するに至りまじた實に當國古稀優等の寺院で
あります現今に至る迄大山に扉の無いのは龍助が此時筈ひ去り
しゆへ古蹟の爲に愈々其後是れを設けづ一の門から三の門迄路
傍堤上に新開遠近守及び松田新兵衛始る諸士の墓があり升る常

龍虎双勇傳

に香花堪へず古戦場の舊蹟歴然と参詣の人々轉た懐舊の念に堪へず只今に至るも思はず涙に袖を濡す人がある云ふのも是れ忠義の徳又龍助が扉を笈ひ行きまして中田村の松の大樹に立掛けて置き置した今に里人が此松を門扉の松と申し升閣話休憩きまして真淵龍助は宙を飛ぶが如くに富岡の城へ立歸り丈六寺の大變を評かに諸士に告げました然るに富岡の城の面々は餘りのこもに呆れ果て泣くに涙は出づ叫ぶに聲さへ出ぬ位は只茫然と呆れ果れ居りました此時龍助は松田の遺言を守り申すには龍何れ元親が大軍時を移さず當城へ押寄せ来るは必定なり逆も味方は無勢にて指揮をする將ども少く防戦すること叶ふべからず一先づ退城して若君を主護り三好山城守に頼みて時節を待ち此御無念を晴し奉らんと息を吐いて申出でましたから一同成程龍助殿の申される所至極道理である然らば………そ。卑法と云ふ次

龍虎双勇傳

第では無いが大將打たれて殘兵全からづ周章ふためへて支度を取掛りました龍助は若君二方を背に置ひて新開家の寶物名劍等を取纏めて間に紛れて巳れの故郷を差して落行きましては最も憐れ限りでござる西方村へ着きましたは翌日の四ツ頭をい當今は前回述べたる如く太郎左衛門は何れへ参られたか行衛知れぬ母のねぬい只一人糸を繰り綿を摘み又は機を折つて其日を幽かに送つて居り升が伴と父の事は少しも忘れる暇は無いつても今日とて機を折りあがら一間の内ぬいア、一父上は如何なされたか龍助は如何いたしたか世に妾はど不運の者は無い母には幼少の砌りに別れ父はあれども義の爲に身は雲水の僧と成り行當たりハツたれ共草枕御死になされたことであるか夫も未花御存命なるか御便りとても更に無く便りに思ふ一人の悴は君に仕つて己れが儘に成らぬ身体是れとても戦國の習ひ明日れも

龍虎双勇傳

知れぬ身であるおら思へば心細い身の上ヨと女心の常と爲り涙
に暮れて居る所へ入口に聲あつて 龍は申すく ぬいハイ
……と云つて立腹で見れば紛ふ方無き怪の龍助見れば中二
人の子を背置ひ右手に是を押へて左りには一包みに爲た物を携
へ髪はバラ／＼に成つて素裸定の儘眼中血走つて居る様子は物
凄まじいばかりぬいハ、龍助であるか如何いたした今も今とて
其方のことを考へて居つた所マアく上んなさい 龍ハイ御免
なさい……サ若様此方へお出で遊ばせど足を拭いて上へ昇がり
龍借てお上御機嫌宜しう追々御無沙汰をいたしましたぬ御
無沙汰は互ひのこと此頃の噂には元親様の御勢軍と和郎の御
主人様の御主人新開様と御合戦然し和郎の御主人の方日々御
勝利のこと陰ながら聞いて何のやうに嬉しいか知れませぬ然し
云ふ中で敷ならぬ和郎の身とは云へ何う爲て母の機嫌杯が逆ぬ

龍虎双勇傳

られたる居るものか更に顔を見せないのでこそア、定めて新兵衛様
に従つて忠義を盡して居ることかと陰ながら神や佛に祈念して
お前の無事を祈つて居ります、シテ其寸隙も無い中に今日は何う
爲て是れへ來やつた又此若様は何れの若様でありつるか万々命
が惜り成つて逃げて來たのではあるまいの。と流石は川田太郎左
衛門の娘たけあつて孟母に劣らぬ女丈夫の言葉、龍助は差俯向い
て聞いて居りましたる可いつもながら有難き其れ言葉、其れ疑り
は御道理のことなるら先づ一通り御聞下されぬと主人と顔む松
田新兵衛どのに討死なされて仕舞ひましたぬいハ、……那の父
との命を御助け下された松田様か…… 龍ハイ……未だ夫れ
みか新開遠近守殿も敢無御最期其次第は斯れく云々で御座
る……と一什一伍を聞いたれぬい女ながらも或山の方をハツク
と白眼んでぬチユ……夫れはマア飛んぞこと……夫れでは此

傳勇双虎龍

若様は富岡の城主新開様の若様か
毒丸と仰せあるれ方、松田新兵衛殿の遺言に由つて城守から御救
申して参りましたね、松田新兵衛殿の遺言に由つて城守から御救
の中に喜ぶれぬ、松田新兵衛殿の遺言に由つて城守から御救
に退つて兩手を突へぬ、松田新兵衛殿の遺言に由つて城守から御救
ぬ真淵龍助の母でございませぬ、世が世であらば一國一城の御主様
が斯る賤か伏屋にお出で遊ばす、世が世であらば一國一城の御主様
り升が足も時節が程は御承抱遊ばせ決して御心配無く……と
涙を流して物云ふ有様、忠義無類なことでございませぬ、松田新兵衛殿の遺言に由つて城守から御救
へるお方は當年七歳未だ幼少のれ方であり升から格別悲しいと
も思はない、松田新兵衛殿の遺言に由つて城守から御救
を聞いて大きに悦びぬ、ア、流石は楠孔明にも劣らぬ新開様の
御息おな……と是れより母子二人爲て大切の上にも大切に松

傳勇双虎龍

毒丸の成長を樂み傍ら天下の動靜に目を注げて居られました、然
るに旨く行かないもので其翌年即ち松田新兵衛殿の遺言に由つて城守から御救
四日の夜から松田新兵衛殿の遺言に由つて城守から御救
驚き醫者ヨ薬ヨと手に手を盡すと雖も是れ所謂驚風の虫と申す
病子供は驚風に掛つては容易に直りませぬ、僅か三日に爲て遂に
冥土の客と成りまじたから龍助は天を仰いで歎息爲し、龍田な
る哉命なる哉愈々新開家滅亡の時節來つたることか、と手の内の
玉を奪はれたるうに茫然として居たが、おぬいも供に漸く野邊の
送り濟せ七々日の吊ひも手厚く儲て四十九日の來りました時
に龍助熱々考へるには、龍此ツア斯ふして居る場合で無い、鬼に
角主人の遺言に従ひ三好山城守を便つて出來るものなら新開家
を恢復させんと心を決して龍儲て母上私に斯く考へますか、是か
ら中國へ下らなければ成りませぬ、何卒御暇賜はり升るやうに

龍虎双勇傳

如何にも道理此母には決して心配入らんから速かに中國へ参
りますやうに龍有難き仕合せ然らば御機嫌宜しうと其所で三
好山城守は丹波にあり升から中國丹波を差して發足いたしまし
た時に織田信長は尾張より起つて畿内は勿論中國筋をも併呑な
し又一方には朝倉家淺井家六角家等英雄諸國に起つて一日も合
戦止む時無く去れば中國筋の諸城も武備怠らず龍助は陸地淡路
島を渡つて播州明石へ着し夜中も恐れづ道を急いで段々に進ん
で行く内に遙か山陰に女アレ……助けて……女の聲龍
助耳を引立てて龍ハテ訝おしき今の聲確かに女に違ひ無い如
何なる事でありつるかとも其聲を當に來つて見れば荒くれ男子が四
五人で一人の娘を捕へ甲是サ女中如何程わめへたつて泣たつ
て人里離れた此山中で況や草木も眠る丑三ツ時誰も來る氣支
へ無への花から夫れより温順くハイ承知いたしました勝手に香

龍虎双勇傳

箱を御使ひなさいましと肌を許しなせ命まで貰をうもは云わね
へのだサア器用にウンと云つて抱かれて寐るか乙ライ今
も親分の云通りウンと云つて肌身を許し親分可散々慰んだ其跡
の御餘り頂乃公達か入れ變り立變り腹散々ばら念佛講和女の
顔の好いのが不運……だサアウンと云つて親分が腹を立ぬ内に
云ふことを聞なせへ女イ、エ壁へ命を取られやうと私には前
方に肌を許すことは出来ません何うせよ御慈悲お情けに勘忍なす
つて下さい甲エ、面倒な何う爲ても云ふことが聞かれへと云
やア詮方が無へ斯ふ爲ても思ひを晴らさるア成られへのだと
アワヤ賊の爲に肌身を汚されんも云ふ一殺那松の木蔭より現わ
れ出でたる真淵龍助龍已れ等何をいたすのだと襟筋掴んで彼
の頭らしき者を肩に擔ぎ向ふの岩を規つてドンと投げる子分の
者へ是れを見て乙ヤ、何か出たア可つて餘計な所へ出望張つ

龍虎双勇傳

て乃公達の戀の邪魔する惜い奴
飛んで火に入る夏の虫 丁、覺悟爲るげ。と三方から劍を抜いて切
つて掛る 龍心得たり。と龍助は飛鳥の如くに身を變じて右と左
りに彼の賊を取つて投げ、今果て 乙、強い奴だマ
ゴ、爲て居ると命が累卵へッレ逃げる。と云ふと蜘蛛の子を散
す、如く雲を霞と逃去りました。残るは彼の女と龍助のみ、逃りは
木嵐しの音と水の岩に當つて落る音のみ、ゴッゴッ……と物凄
く女中は地獄で佛の思ひを爲て恐る。前に出で 女何所如何
なるれ方様かは存ひませぬ。既に危き此場をば御助けなされて
下されたり、御禮は言葉に盡されませぬ。有難ふ存じ、夕、涙に
播、容れたり、龍助は星の光りに能く見れば、所に稀れなる美婦人に
て、打拵さへも立派、星の光りに能く見れば、所に稀れなる美婦人に
禮には及ばぬこと、然し何れの息女なるか、斯る深夜に人さへ通わ

龍虎双勇傳

ぬ山中にて今の始末は如何なる理由、シテ、御身はいづれの御
方…… 女、ハ、イ、御尋ねに預りまして一伍一什を申上げます、私し
は備前岡山の城主池田輝政の家來にして津田玄蕃と申す者の娘
菊江と申す者であり、今日は下女を連れて神詣りの途中、華
居の陰から現われ、今、悪淡者共、下女は曲者の一人に、
倒されたる儘、私には曲者の小脇に引撮へられ、まして斯る山中に連
れて來られたのであり、外、既に危い此場の有様、御助け下し置かれ
まひて有難く存じます。と涙片手に語るのを聞き、龍助は心の内に
合点さまして、龍、ア、左様であるか、御身は然らば池田殿の御家
來の御息女か、イヤ、危い所であつた今、此所で御救ひ申して此儘別
れたらんに、は佛作つて魂い入れ、つぎやら御宿まで御届け申上げ
るでござらう、親御も無や御心配いたして、れ出でなさるであらう
菊江、ハ、イ、有難う存じます、左様なれば御言葉に甘へお連れなされ

傳勇双虎龍

て下さいまし 龍如何にも承知いたした、サ案内をさつしやい。と
 菊江と云ふ娘に案内を爲して程無く来た、玄蕃の屋敷此方は下
 女が立歸つて下女、娘さんが是れ云々でござい、何と聞て
 雨親はじめ家來の人々、況て玄蕃夫婦は焼野の雉子夜るの鶴子
 を思わぬ親は無い、四方に人を走らして那方此方と探さした、が更
 に行術は分らない内に、モ一夜も追々更けて来まじたから雨親
 は何う爲たことかと悲歎の涙に暮れて居りました所へドン
 乙エ、門の戸を叩く者もある門番は變に思つて、甲ライ同役
 乙エ、甲誰だ、らう門を叩くのは……乙今時分誰も來る者は
 無へ、探しに出た人達も皆んな歸つた筈、旦那も締めて何れ明日の
 ことに爲らうと寐ちまつた、狸だらうと云つて居ると又トン
 龍、龍、甲ライ、乙エ、甲、狸が頼むなんと云ふか知
 らん、然ふヨ、なア人間らしい今時分誰だらう。と門番奴、詮方が

傳勇双虎龍

無いもんだから、惚病を明けて、甲誰だ……と隙かりて見るそ
 一人は知らない侍体の者です、一人は正に當家の令嬢、菊江で
 さいますから、大きに驚いて、甲ライ、柴田家のね、娘さん、歸
 つて来たせ、乙ナニお嬢さん、歸つて来た……近頃、狐狸は化
 けるのが上手に成りやア、つたなア、家で娘さんのこと、心配
 爲て居るのを聞きやア、つて狐狸までお嬢さんの風で来たア、が
 つた、と見へるツツカリ、明けちやア、不可ぬへせ、龍コレ、明けて、吳
 れ、當家の息女が、曲者の爲に、既に危き所をば、御救ひ申して、連れて
 参つた者だ、決して怪しい者、ヒ、ア、無い、開門いたせ、乙、那、ん、こ
 とを吐し、ア、ある、蓄生め……菊江も、見兼ねて、菊、柴、田、で、は、無、い
 お、今、顔、を、出、し、た、の、は、妾、の、危、き、を、御、救、い、下、さ、れ、た、大、恩、人、失、禮、が、あ
 り、て、は、相、成、ら、ん、明、け、て、呉、れ、る、や、り、に……聞、て、流、石、疑、ひ、深、い、門、番
 も、狐、狸、の、類、で、も、無、い、と、思、つ、た、か、ら、喫、驚、爲、て、此、趣、き、を、與、へ、告、げ、ま

龍虎双勇傳

した、玄蕃夫婦は寐もあらず心配仕て居る所へ此由で申すから驚いて夫婦で玄關へ出迎い門を明けさして見れば紛ふ方無き娘の菊江玄蕃は天へも登る心地爲なむ 玄ム、娘であつたか 菊江の父上……。菊江は涙に咽よのみ玄蕃は眩度思案を爲て 玄何れのれ方お娘の危急を御救ひ下され有難い仕合せ誠に御無禮をい九ひましたイザ此方へ御通り下さるやうそ夫れより奥の間へ通して先づ初対面の挨拶も済み龍助に於ては松原の次第を物語る娘も共に悪者の爲に既に危き所を助けられたる次第を物語る委細を聞いた父の玄蕃は娘の命の大恩人と厚く是れに謝しまりて玄マア、今宵は既に更けて居り外から御一泊を願うと云ふ龍助も今更辭する理由にも参りませんから云ふかまに 其夜は玄蕃方へ厄介に成る事に相成りませしが扱て是れより龍助如何相成るお一寸一息いたしましして申上げます……。

龍虎双勇傳

扱て其翌日に至り外で津田玄蕃は改めて酒肴を以て龍助を待遇し座を正して玄蕃扱て龍助の此度の御恩は言葉に盡されません就ては別に御急ぎの旅で無くんば何卒御逗留下さるまじく如何に……龍助頓首して 龍道は有難き仰せ某しとても別に急げる旅でもおきらん然らば當分御厄介に相成りませうと止められるから龍助據ころ無く津田の屋敷に逗留をいたして居りました此津田と云ふ人は如何なる身分の者だといふと備前岡山の城主池田三左衛門輝政の臣にして御物頭を勤め食祿千五百石を頂戴爲て居る人龍助は三好山城守を便つて主家再興をもかさんとす大望のある身に何ん中途に斯く安閑と爲て居るかと云ふに是れは種々次第のあること今天下の動靜を見るに右大臣平

第五席

龍虎双勇傳

信長既に本能寺にて明智光秀の遊寄せに逢ひて自滅爲玉ひ織田家の老臣柴田權六郎勝家佐久間玄蕃頭盛政丹羽五郎左衛門長秀等も皆豊臣秀吉の爲に滅ぼされ又は降伏なし今秀吉は關白に任せられ中國は勿論日本中秀吉に背く者は皆打滅されて仕舞ひました去れば三好山城守も秀吉の爲に征められ今は跡方も無く由つて龍助最頼みの綱も切れ果て龍ア、一となり命なり然らば我は仕官爲して聊かなりとも新開家は勿論松田新兵衛殿の家名を起さなければ成らんとコ一思つて別に行く所も無い玄蕃が勘める儘引留められて居つたのであり舛丁度津田の家一年程厄介に成つて居りました別に己れの爲す用とて無いから近所の様子を見るに人品と云い骨柄と云い天晴れ勇士と云つて耻る所が無い且つ武藝も相當に出來るり義は固し何一ツと爲て不足る

七十

龍虎双勇傳

無いからア、云ふ者を我聲にたいもの花と早くも目を注げた一日眞淵龍助を呼んで玄蕃で眞淵氏今日改めて御身を身込んで御願ひがござる何んと御聞容れは下さるまいか龍助變に思つて龍助は異なると承るものかな僅かのことをいたして斯く永く御恩を受けたる貴殿の御言葉如何なることかは存せぬと身に替へても聞容れませり玄蕃莞爾笑はて玄イヤ夫はどのことでも無いが龍助の必ず御笑ひ下さるな焼野の雉子夜るの鶴子を思ふ親の心は皆一ツ好いが上にも好い聲を持たせたいと女子を持つてば思ふの老の身の常今迄随分家中にて聲に行こう嫁に欲いと年頃の娘もあると申込んで来る者も澤山どつた然し不束なる娘と云へ己れの身に成つて見ると少しでも好い聲を持たせたいと秀吉公の武徳で天下は太平に成つたとは云へ未

七十一

龍虎双勇樓

花何と無く血醒い世の中シテ見れば明日にも知れぬ身の上でござる何とと甚だ申兼ねたる次第ではござるが御氣には召すまいが娘の菊江を妻に持つては下さるまいか謂れて龍助は大きに驚き成るとは云へ何れの者か素姓も分りもせぬ拙者千五百石の御家に御免に入らる杯と思ひも寄らぬことであり外何うか其儀ばかりに入らぬ所ではござらぬ餘りに勿体無さすぎて……
せあるな何れの者か素姓も知れぬと仰りある可某しとても眼はどざる謂づと夫と存じて居る如何に望みを抱くとも時節来らつば詮無きことを御身とて今御心にある大望も願て時節来らつば遂げる事も出茶ませり先づ夫れ迄は沈着て居られた方が御身の徳、何うあつても拙者の舞に御成り下さるふとは出来ませんか

龍虎双勇樓

龍助も考へました、今目的も無いのに那方此方マゴ付て歩くより此りやア此處の家の舞に成つて仕官を爲て折を見て主家再興を計つた方が云い。と一胸に考へましたから龍不束かなる拙者を斯迄仰せ下さるなれば如何にも身に過ぎたる仕合せ、然らば仰せに従ひ言に由つて未長く御面倒を御覧下し置かれ升やうに……
立、御即容下されたかア、一夫は何より嬉しむこそ善ほ急げと申すから早速明日婚姻の式を擧げるでござらうと昔しの人にはヒツカチですから其所で娘にも妻にも世話しをして婚姻の式を擧げました娘は固より己れの助けられた恩人、夫れに少しは思召しが無いではありませぬから大きに悦び妻も悦び茲に龍助が菊江と夫婦に成りましたのは慶長二年の春であり升夫婦中も誠に睦じく翌年に至ると菊江が何となく只ならぬ様子、懐胎の事でもございますから龍助も悦んで居りなした、偕て十月十日に爲

龍虎双勇傳

て生れ九のが男子夫婦は天へも登る心地爲て悦ぶ玄蕃も初孫の
事故下へと置かず育て居る一喜一憂は免れ難く満れは欠くる
世の習ひ此孫百二才の時玄蕃は敢無く冥土の旅菊江の母も良人
に死なれて落膽爲たが引續いて病死爲て仕舞ひまじりた偕て龍助
菊江の中に出来たる子供は名は八助と付けまじりて蝶ヨ花ヨと育
て居りまじりたハヤ六才に相成つた頭は筋骨逞しく肉肥へて
一見十五六才に見へる從つて力量も勝れ折節は人々も驚かせる
中にも又心配なりは八助のは暴虎豹河の勇と云つて所謂猪武者
と云ふ奴去れば折節は呼んで意見をする事もありました七八
才の頭から學問武藝を厳しく仕込まましたから學問の爲に角が
取れて此頭では少しは温順く成つた由つて龍助も龍是れなれ
ば……と末頼母しく思つて居りました頭は慶長十三年帝は後

龍虎双勇傳

水尾帝であり升朝鮮の役もハヤ濟んで秀吉は薨じ玉ひ今徳川家
康の勢はひ飛ぶ鳥も落ちんばかりの様子秀頼大坂にありと云へ
とも諸侯は心を徳川家に寄せ家康は殆んど海内をば一統い
たりまじりて淳和獎學兩院の別當源氏の長者征夷大將軍に任んじ
玉まひ秀頼は只右大臣に任ぜられたるばかり元と秀吉が臨終に
臨んで家康に天下の後見を頼み秀頼十六才に至らは天下を返り
呉れヨと云はれた然も十六才は愚か如何才に成つても家康が天
下を返すべき様子が無い家康の心では如何にも爲て豊臣家を滅
ぼして仕舞いたいと云ふ去れば其落度を白眼で居りました内に
慶長十九年と成る時しも七月豊臣秀頼自ら方廣寺の大佛供養に
赴かんとして爲ましたか家康其方廣寺に出來した鐘の銘文中に國家
安康と云ふ句がある是れを早くも見て文句を付ける種と爲て家
康の字を籠めたるは我を咒咀する者なりとあつて方廣寺大佛供

龍虎双勇傳

養を止めさせましたのは看客も歴史で先刻御承知のことであり
ませう、是の時に至つて大坂恩願代の人々は秀頼卿が既に成長
いたしたから政權を取返そうと密かに兵備をいたしました、早く
も是を知つた家康が片桐東市正且元を召て家康近頃大坂の諸臣
異圖ありと聞く是れ殆んど秀頼に禍ひする者なり汝速に歸つ
て保全の道を圖れといふ且元歸つて三策を奉りましたる所流君
怒つて關東に二心ある者と爲て是を誅せんと思つて且元は己
れの領地茨城に退去した……且ア……豊臣家滅亡の時節來れり
と疑息いたして居りました大野修理之亮治長秀頼を勸めて兵を
擧げしめた檄文を發して諸侯を招き又廣く武士の浪人を募る長會
我部盛近、眞田幸村、後藤基次を始めと爲て來り應ずる者六万人、徳
川家に於ても大いに驚き忽ち其勢都て十万人、歴長十七年十一月五
秀忠は江戸を發し、たむ忽ち其勢都て十万人、歴長十七年十一月五

龍虎双勇傳

日先陣、藤堂高虎、伊井直孝、兵を勸めて住吉に陣り、治長の弟大野道
見天王山を燒て東軍を驅散らさんと爲ましたる高虎敢て動かす
池田利隆公及び其弟忠繼、忠雄、北島に陣しました、利隆公は川上に至
瀬より押渡つて守りを置て北島に陣しました、利隆公は川上に至
つて長柄川を渡り、忠繼、忠雄、北島、又川上から渡つて、攻寄せ、大坂
勢一戦の許に破れり走り、また十日の日に秀忠伏見に着して、是
に至つて、永陸の諸軍集り來たる者五十余万、大したこもどさい
ます去れば、是れより數々、關東勢と大坂勢と大合戦ありました
然し本編は大坂軍記でも無し、又難波軍記でもありませぬから、委
しくは申上げませぬ、却説も津田龍助、事真淵龍助も主人池田利隆
が斯く出陣いたされたること、故無論此度の大坂征めにも出陣い
たりて居り、由つて龍助も數々、抄取の功を現はし殿様より御褒
めを頂いたること、數知れず、遂に三千石の御墨付をも拜領いたし

龍虎双勇傳

九、誠に名護なことでありまして、然るに慶長十九年大坂冬陣の礮
り大坂城より夜討を掛付けられ、關東勢大いに敗走して池田勢も據
る無く、楯板を捨てたる儘、武器兵糧をも其儘に此所を逃去りまし
た、スルと翌日に至るも城方より關東方へ書面を以て城下に捨あ
る楯板一時に一人にて引取候たう御手配あるべし。と申來りまし
た、家康と當時征夷大將軍は秀忠公に譲つて大御所と云はれて
居る、大御所公も甚だ御機嫌悪しく且つ是には辟易爲た、逆も出来
ない相談でござい升、楯板と云ふ物は一枚の重量が拾二貫目位い
ある、夫れが八枚だから九拾六貫目ある、夫れも一つの石たどか何
んも云ふ事なら始末も好いが巾の廣い連も一人では嵩張つて持
切れない品、夫を一八で持運べといふ、所謂大坂方から無理難題を
云つて來たのでございます、然り昔人は意氣を悪るいから然んな
ことば出來ないといふことが云へないから早速返辭を認りて大

龍虎双勇傳

坂へ送りまじりた大御所も返辭は遣つたけれども然んな化物も無
いから家康、兎も角も池田を呼んで談じて見やう。と云ふ其許で池
田利隆を御本陣へ呼びすした
因に由つて申上げ升るも此頃には輝政公は既に逝去いたされ
て御子も八人でござい升、御領が利隆、次も忠繼、三番目も忠雄
輝澄、政綱、輝興、政虎、政利といふ利隆殿の家督相續遊はして眞淵
淵助は當時此方の家來に成つて居り升
利隆公は大御所からの御召であり升、何事なるかと近臣十四
五人眞淵龍助親子を引連れ大御所の陣前へ來り、利隆大御所公何
事でござる家康、イヤ利隆殿外の事でもござらんが昨夜の夜打御
事、然に味方大敗走勝敗は天にある所別に耻づべき所も無いが貴
公の陣中にて楯板を八枚城下へ投棄てたる儘、敗走いたされ九由
左様でござるか、利隆公もハツと赤面をいたされて差俯向く本陣

龍虎双勇傳

に控へたる伊井、榑原、本多、酒井を始め居流れたる人々、氣の毒に存
じて是れも差俯向いて居られたる家康、昨夜は何れの陣々も皆狼狽
顛動いたされたる折からなれば決して貴殿の陣のみにもあらず他
も随分見苦しき逃方をいたされり者もあつた夫れは好そ爲て
唯今城中から斯る難題を申して參つたが如何いたされたもので
あらう、利隆ハ、ア。利隆其手紙を受取つて披見よ及よと其文に曰
く

謹で申す昨夜夜打の節御敗走の有様誠に以て目撃しく笑止
の至りに不堪、就ては徳川家の印しある楯板城下に打棄あり
人馬の往來に頗る邪魔に有之候間速かに右の楯板丈取片づ
けさせ下されたし尤も右八枚の楯板一時に一人にて取片付
ける程の者に御命じなされたく萬一右の如き勇者無之き節
は城内より御貸申すも不苦當城には八枚は愚か十五枚位い

一時に背負ふ勇者は、帯で掃て笑て棄る程御座候念爲申上候
徳川大御所殿

大坂城内

大野治長

龍虎双勇傳

慶長十九年十一月三日
利隆サツと面色變られ已れ楯くき大野治長……とハツタと大坂
城の方を白眼んだが一時に楯板八枚を背負う者はない是れ尋常
の人の出来べき業に非ず、大御所は利隆の顔色を見て厄りました
が、家康如何に御身の軍勢の内、此大役を勤むる者はなきや如何
に……無くんは關東勢の耻辱此上もなひあらは早々差出たり玉
ひ、利隆遠東なくも御身分の臣を見返つて利隆如何に我家の内
に城下にある楯板八枚一時に持還上べき者はないか、主の耻辱を
雪ぐ者はないか、と仰せある衆皆默然と爲て頭を垂れし、徳川
本陣の人々も一同然んな筈、棒な力量のある奴がある者か、と口に

龍虎双勇標

は云はねと心の内利隆は言葉を屬まりて利隆何うじや無いか萬
一あらば恩賞は望み次第興へるぞヨ……云つたが昔んな褒美
は怒りが持つことが出来ぬ近藤力量があるつて法圖がある三枚なら何
だの貴公平牛力量自慢だから斯う云ふ時に一ツ出て恩賞を望み
次第貰つちやア……近藤力量があるつて法圖がある三枚なら何
うか斯ふか持つてたらうが八枚なんて自滿力量があるものじや
アない貴公何うだへ里拙者は一枚ひつさア持つてない……
いて居る此時遙か末席より雷の三國に響くが如き大音にて
「アイヤ我君其楯板八枚は拙者一時に持歸り關東勢の汚名を雪
ぐでございませうと怒鳴つて大御所始め居並ひたる人々は何者
なるかと見ておれぬ未だ揚卷の美少年利隆卿は見回つて利隆
、汝は津田八助であるか適れ勇しまえとありつる首尾克く汝
一人にて楯板を持歸らば汝に五百石を取らするぞヨと宣ひま

龍虎双勇標

八然らば拙者が望みの次第御免の証據御役人の申にて印形
ある方より賜りたしと憚かる色なく言上にあふ利隆卿始め一同
も無禮とは思へども關東方百萬騎の内にて此大役を勤むる者も
ありませぬから大御所公は莞爾お笑ひ遊ばして家康ヲ、勇々し
くお申したり、其言付は予の遺すであらう。老中酒井雅樂頭は
命じて彼れの望む所を問はしめました、雅樂頭は八助を前に呼ん
で雅樂コヲヤ君命に由つて汝が望む所を問はしめました、如何なること
お申して見ヨ八助が曰く、八去ん候拙者は生得人に味を屈する
ことを好まず此後何事にも由らす取次を願ひこそ多く我主人池田
侯に直言仕りたし又往來にて家老其外重役の人々に目禮仕らず
又金銀米穀入用の節は奉行役人より直ちに受取り申りたく右の
通り御免下されば只今城外へ参り楯板八枚取歸るべし何んの
遠慮もなく述べました。利隆の是れを御聞遊ばして賜身を尾込

龍虎双勇傳

んで好むことを云ふとは思召したが取除ければ大御所の御機嫌
を損づるから詮方がない聞届けて遣わさうと一思召して在ら
せられ大御所公は八助の遠慮なき所を御愛し遊して利隆卿に
向ひ家康守が頼むに由つて八助の申す所聞届け遣わすやうにと
云ふ利隆卿利恐れ入つた次第如何にも彼れの申す所聞届け遣
わすでござらうと其所で酒井雅樂頭が一本の証書を認め雅樂
頭が是を受合ふてろの所謂酒井公が受人に成つて利隆卿を八助
に一本の書付けを入れまじした八助是を押戴き八助速御聞届け
下され難有ま仕合せ左様ござらば城下に参り楯被持参いたす
とぞちうとヌオ大坂城の玉造口に來り豊臣勢に向つて
八ヤ一 大坂城能く承われ我は池田の家來津田八助こと本名
真淵八助と申す者である、只今此楯板を一時に持歸る者なり方々
活眼を開いて見てあれヨ。と其聲の大さいと戸障子にビリ

龍虎双勇傳

響くはかり大坂勢は是を聞き城の間を明けて是れを見て居る内
に八助は八枚に諸手を掛け引起して懐中より一本の繩を取
ひ夫れに翫めて背中に笈ひ悠々として立去る様子古今無双の力
量であり舛城方にては只一同アレヨくそ呆れて居つたが其大
言を心憎しと思ひけん一人の城兵傷へにあつたる鐵砲を取るよ
り早く三拾目の玉を籠めて八助を狙ひズドンと一發狙ひは外れ
づ楯板の端に當りまじたが八助八ウム……と足に力量を入れ
少しダジくと眼さへ爲ましたが踏止まつて倒れもせず陣所へ
こすは立歸りせした大御所も是を御覽あつて大御所ア、一
れなり津田八助をやら關東百万の耻辱を雪ぎ呉れたる者は
汝である……大御所御褒めに預かつて大御所から御威状を賜り
まして利隆卿も共に面目を施して俗て大坂も滅亡に及次諸軍皆
夫れく歸國遊ばした時に利隆卿は兼ての約束の如く龍助を三

龍虎双勇傳

千石八助は十六才に爲て五百石、然も酒井雅樂頭の家書付けがあり、外から重役と雖も途中に於て目禮をせず、傲然と爲て歩ける少し、白痴氣たやうで、まあり外に戦國から太平に成り、際には能く斯ふいふところがありました。大久保彦左衛門の我儘勝手、如き則ち是れであり、外に改めて八助は御近侍頭取り、仰せ付けられ、親子揃ふて御覽へ芽出度く、後龍助は隠居いたして八助が家督相続に及び、入助の祿は其儘で併して三千五百石改めて津田玄蕃と云ひ、妻を貰つて是れ三人の子を儲け、龍助死しての後遺言に由つて君に願ひを上げ、惣領を以て已れの家督相続をなさしめ、食祿千五百石、次男を以て新開の家名を立て、食祿千石、三人目が女子であり、外から養子をして、松田新兵衛の家を千石に立て、池田侯の家の中に新開、松田、津田の三家並火繁盛を爲たは、皆是れ龍助が誠忠に依る所でありませう。積善の家には餘計あり、積悪の家には餘殃ありと、古人の金

龍虎双勇傳

言宜なるかな、御維新の頃までも右三家は備前侯の家に、歴然と残つて居り、ました、川田太郎左衛門は、義の爲に出家、爲て何所に果てたか、其終りを知らず、龍助の母れぬいは、後龍助が已れの家に引取つて、孝養を盡くして、何不足無く一命を終る、寛永の頃、池田家に於ては、城下杯で八助を向ふから、決つて來ると、御家老御目付杯が皆、横道へ通入つて、八助を除けたと云ふ話しが、未だに残つて居り、外が是は己れの役柄を重多ていありませうか、兎にも角にも、龍助親子の如きは、武門の龜鑑と謂つべく、先づ眞淵龍助誠忠傳は、豫め斯の如く是より、龍助氏に劣らざる所の英雄の傳記を言上いたし、外から今暫くの御辛忘を願ひます……

第六席

歳寒して、松柏の凋むに遅るゝを知る、實に芳名、危難の内に生る

傳勇双虎龍

とと申し外、頭は寛永の中ば天下は太平に相成つて弓は袋に納り、太刀は神社佛閣に納め、國政能く文弱に流れんとするの此都近き船着の地に武勇を振ひ、政百の士人を切つて威名を轟かし、國主の名譽を後世に輝して、大丈夫があり、外、爰に南海道福嶋の城主蜂谷侯の家の中に御指南番を勤める食祿二百五十石廣瀬權太夫と云ふ人がある、此家の仲間、秋山猪助、武宗と云ふ仲間と云へは、市助だとか三平だとか、云ふ名が多いが猪助はかりは武宗と云つて名乗りがある昔しは商賈も何も無いノラクラ者は皆此仲間、成りまして、あるから、仲間には、碌な者があり、ません、俗に折助、根生と云つて、骨を舂み、酒を飲み、たゞる、然るに猪助は御主、大切に奉公を爲て、骨を舂み、酒を飲み、たゞる、然るに猪助は御主、大切に奉公して、其相問には、導場へ往つて、家中の各々に、權太夫が、武藝を教へるのを見て、何よりの樂みといたして、居りました、稽古で無い時

傳勇双虎龍

は密柑箱を横に爲て、其上に、淡粉を載せて、一心に讀んで、いると云ふ、去れば、他の仲間、共も、甲、ウム、一猪助か、那奴ア、二十五日だ、と云つて、交際を爲さない位、い、演者も、二十五日、とは、何んの事だ、と猪助に聞、ま、した、ら、變、人、様、だ、と、云、ふ、酒、落、ち、り、う、で、拙、な、い、酒、落、ち、あ、る、の、で、す、廣、瀬、の、家、に、は、若、黨、の、孝、助、に、已、れ、と、奉、公、人、は、二、人、を、仲、間、部、屋、が、廣、い、か、ら、家、中、の、仲、間、が、大、勢、遊、び、に、來、て、は、小、人、閑、居、爲、て、不、善、を、な、す、と、か、長、年、を、爲、た、り、メ、ク、リ、を、引、い、た、り、色、々、な、真、似、を、爲、て、居、る、今、日、も、大、勢、集、つ、て、來、て、此、方、の、隅、に、三、人、向、ふ、の、隅、に、三、人、各、々、好、む、惡、戯、を、爲、て、居、り、外、願、て、一、人、の、中、間、が、甲、ヲ、イ、勢、助、猪、エ、ハ、甲、エ、ハ、ヒ、ス、ア、無、ハ、汝、エ、の、様、に、火、の、玉、ア、喰、ふ、と、明、け、て、も、暮、れ、て、も、火、の、玉、ば、か、り、喰、つ、て、る、奴、は、無、ハ、然、ル、密、柑、箱、に、ば、か、り、倚、掛、の、て、本、を、見、て、居、ね、へ、で、折、々、に、は、花、の、一、ツ、も、引、か、ね、へ、か、猪、乃、公、ア、花、な、ん、ぞ、は、物、を、知、ら、ね、へ、か、證、方、が、ね、へ、甲、知、ら、ね、へ、の、じ、や、ア

龍虎双勇樓

無へ汝エの覺へる氣か無へからだ遣りたけり矣ア教へてやらう
かなア 猪然ふヨ何んたつて覺へて置て損はねへから教へて貰をう
好いか是れが梅花 猪梅なんぞは教わらねへたつて知つて居る
其山の上には太陽様の付いて居るのは何んた 甲是れか坊主花
猪へエー……此方にある人さ傘を差して居るのは何んだい
甲此り矣ア雨の二十花 猪へエー妙なもん花なア梨みたいたど
カ 光つた奴は…… 甲是れか此りやア桐の二十だ此桐に此
櫻に鶴の付いて居る松に 此坊主で四光と云ふのた 猪止るう
……何んだかチツトも分らねへア此方に居て見て居るうヨ
甲詮方おねへ奴だたア汝エの様な不意氣な奴はありやア爲ねへ
猪籠棒奴エ斯んな物は覺へなくつたつて不意氣てへまどあ
るもんか取られて寒の内素の裸体で居る奴こそ眞實の不意氣た

龍虎双勇樓

マア 御免蒙らう。そ手も出さない猪助の其儘向ふの際に三人
寄つて矢張り花を引いて居り舛から其所へ首を出して 猪ヤ
吉公汝エ大層な物を持つて居るじやア無へお桐の二十に櫻の二
十坊主の二十かある 乙ヲイ吉公は三光の掴み花をヨ氣を注け
矣 吉ヤイ猪助語らねへことを云やアがつて四光を拵へ損なつ
て仕舞つた 猪然ふか濟まねへ勘辨爲て吳んねへ……一八何ん
だいな汝エの手に持つて居る其青は丹尺の付いて居る物は……三
枚あるなア 責ヤ一八は青短の掴みで居るアがる一八猪助花を
願へ花から黙つて居て呉れる。と云ふ是れからは誰も猪助に花を
爲ろ云ふ者もありませぬ猪助は心中悦んで人が何を爲て居や
うそ然んなことには構わなない已れは學同をする其間だに稽古が
始まるそ導場へ往つては遣入つて見るとお出来ないから半窓
に掴つては覗みて見て居る權太夫もア仲間は頼母敷き者で

龍虎双勇傳

り登へて居り升が木刀を取て叩たこそ無んで……エー……
し足袋屋の角石劍術杯とは遠升からヤア御免を蒙り升 天何だ
足袋屋の角石劍術とは何う云ふ理由だ 猪へ、貴郎のはボカ
く 殿打られてばかりれ出でなざるから金槌の川流れて頭の浮
れへ登りたう存じ升が私しは御當家の中間でグスから先生が這
入つて好いと仰せあれば這入り升が先生の御許し無く爲て導場
へ猥りに這入ることは出来ません 三然ふ……先生如何てと
ぎいませう導場へ彼れを入れても宜しうございませうか廣瀬權
太夫は強爾笑つて 權入れるのも苦しうござらんが貴公耻を搔
んやうになさい 三奈是でございます 權なせと云つて考へて
御覽なさい貴公は武士向ふは仲間勝つた所が貴公の名譽には成
らづ負けければ家中の物笑ひでござる那のやうな者を相手に爲て

龍虎双勇傳

大人氣無いでは無いかと云ふのは權太夫の方が目が高いので
あり升猪助は世間武道を覗いては太刀筋を登へて夜に成るも
庭に出で立木から細で木をブラ下けて置ては是を叩いて居る是
れ死術には違ひ無いが好く物の上手なれ少しは劍法が出来る
であらう三四郎の方は眞實の下手藝なので所謂顔古いから年
功で弟子の上座に位いして居るのでござるから其志し違うに
由つて或は猪助がシケを取るかも知れんぞ斯く大切を取つて申
ひたのであり升が三四郎は苦笑つて 三イヤ先生迄がそんなこ
そを仰しやるサ猪助もやら先生の許しであるから是れへ這入
猪へイ……有難ふ存じ升左様なら先生何りかお許しなすつてね
呉んなさい……皆さん御免なさいと導場へ這入つて来て 三サ
仕度をする猪へイと御胴を着ける 三早く爲ないか 猪マア
然んなに威張る者じゃア無へ其顔へ當てる格子を貸して呉ん

龍虎双勇傳

なせへ 三厄介なことを云ふ奴だなア 猪士左衛門の手を貸り
てれ呉んなせへ 三道具の名も知らん癖に人のことを笑たアが
つて……、三四郎は癪に障つて詮方が無いから小ッヒドク叩い
て遣らうと竹刀を持つて待つて居る猪助は自若と爲て仕度をい
たし 猪夫れじやア三四郎さん思ふさま毆打つてれ呉んなさい
と竹刀を取つて背眼に付ける 三ヤ…… 猪サアね打ちなさい
三ウム…… 猪サア！打ちなさい…… 打てめへ 三巴れッ憎さ
も憎くひと三四郎エイと叫んで打込んで来る奴をヒラリ体を變
ひて置て横殿打りに耳の邊りをどヒープーンと奇な臭い匂ひが
爲し三四郎は倒とばかりに俯伏す。一同の門人は手を舉げてドッ
と褒める、此三四郎と申す男は平生天狗でおぞい升から皆んなに
憎まれて居り升から内々好い氣味だと思つると同時に皆猪助が腕
前を感服いたして居りました、三四郎と云ふ男は極りが悪いから

龍虎双勇傳

放々の体で逃出して仕舞つた門人も一同宅へ歸る借て其夜權太
夫は猪助を己れの居間へ呼ひまひて 權借て猪助や忘れもせぬ
三年跡手が殿様に從つて江戸詰の砌り兩田橋にて其方に巡り合
ひ丁度其方が十六の時である世に稀なる少年であると思ひ込
付けて連れ参り以來今日迄其方の舉動を伺ひ居る所思ふに優
汝の心底、我は終日夜は終夜武藝學問に心を寄せ今日の立會實に
感心いたした夫れ程迄に思つて武藝なれば明日より改めて内弟子
と爲て武藝を教へ取らせるから随分共に精を出して勵み升るや
うに……云はれて助猪は涙を流し 猪有難き御主人の仰せ今日の
ことを憎ひとも思召さづれ情け厚き其御言葉は私に死しても忘
却は仕りませぬ左様ござらば明日から内弟子と爲て御教へなさ
れて下さい升か 權教へる所では無い予が妙蘊を教へ取らせる
から一心に勵むやう…… 汝は外の間環とは事變り世が世であ

龍虎双勇傳

らば大... 猪有難ふ存じ升然らば御奉公の餘暇明... 日より御教へなされて下され猪助は固より己の望む所天へ... 生れながらに爲て是を知る者は上なり武藝を學んで居りましたから... 其次なりとは申升が生れなむらに爲て是を知る者は無猪助は... 寐る目も寐づに是れを學んで居りましたから僅か三年の内は... 太夫の太刀筋を殘らず飲込み今は家中の誰彼に權太夫の代... 古をすする師の權太夫と雖も三本勝負では一本は負けるといふ去... れば權太夫も權ア... 未頼母しき者である、と悦ぶこと限りか... 助が廣瀬の屋敷に來つたの如く又如何なる身分の者であるか第二... 回に委しく述べませう...

龍虎双勇傳

第六席

此秋山猪助武宗と申すは如何なる身分の者であるかと申すに先... 祖は阿波の國正端城主三好長春の臣族でありまして主家滅亡の... 後父志賀角之進は浪々の身と相成り忠臣は二君に付へつと云ふ... 言葉を守つて尼葉打朽し其日の煙りも立兼ねて居りました... 居無次第で房州北條矢代越中守の家仕へ二百五十石を領して... 居られました、去れば房州の北條に來つて古へに變る今は果敢な... い暮し、妻を小横と云つて是も女には似氣ない方、角之進は今仔細... あつて北條には居り升が固より三好家を忘れる暇はない、明暮れ... 三好一家の靈を祭つて派に暮れて居ると云ふ、然し己れに子と云... 上者がない何うか男子を一人慾いものと思つて居ると天是れ... を感納ましましてか老年に及んで一人の男子を設けました、角之

傳勇双虎龍

進は大きに悦び名を左門と付けまして手の内の玉鬚の花と大
切に育つて居りまじた追々成長するに従つて左門は筋骨逞しく
幼少の頃から學問を好み然も伶俐で一を聞て万を知る云ふ目
ホら鼻へ抜けるやうな白痴な子供は耳から尻へ抜けて仕舞ひま
す、左門は幼少の頃から學問のみではない武藝が大層好きで近
所に仕合でもあると云へは晝食を忘れて是れを見て居ると云ふ
好きこそ物の上手なれ見て来た物は何んでも覺へて居る能く斯
云ふ人がある既に徳川幕府の頭大學者稲垣秋莊と云ふ人は奇童
といはれた八才の時藤澤東暖先生の門に這入つて勉強爲て居
り升内に成る日の事ですが書林の前に佇つて史鑑といふ書籍を見
て居た東暖先生の之を不審に思つて東和郎が感心して伴れ歸
つたのが只今でも繁昌して居り升半岳先生とは同門です之れは

傳勇双虎龍

三十年ばかり以前の話しで大層其頭評判が高ふ御座いまし、隨
分世の中には然ういふ人あり升が右の左門は神童とまでは往
まますまいが所謂奇童の方で普通の子よりは幾分か水離れ可
ひて居り升るから記憶た事は忘れませぬ武田信玄が軍には勝
そも宜しい敗けさへ爲なければ始終は勝たといつて之れは信玄
の名言で別に需めて記憶するに及ばない、教わつたるを忘れない
のは結構です何んでも人間は勉強第一で御座いますかと思ふて居り
追々書を讀む此兒も奈何いふ事にならふのであるかと思ふて居り
升る時分には恰度七里法華といふよみに忘れんよふにする所
で御座います、なれ共上人の御説教之れを日蓮宗の方が京都の帶
屋の子で日遷といふて親の死んで幽霊が餓を喰したといふ佛説
が御座い升、此佛説には漢學者の昔學者の眼から見ますると大變
に怪しな事御座い升が併し佛の道といふものは又別なもので

龍虎双勇傳

御座いますから幽霊が飴を買ひに往つたかも知れませんが、其時分
日遷といふ人は大そり有名な方で所々のれ寺へ往つては説教を
致すと數万の善男善女が隨喜の涙ふ暮れるといふ、勿論日蓮宗の
お説教といふものはなか／＼怪しなもので彼辨士が説教爲ます
る間には南ン……妙……南ン……と一々叱りまはす始めて説教な
ぞを聴に往つた人は柔術でも取るのか、劔術の稽古でよするの
と思ふ位い、今日は程近き寺にお開帳があつて其中回向といふ時
志賀の女房は左門の手を取つて説教を聴に参りました涙を流し
て聴いて居る態で女房の小櫃は小使にでも往ふと思つてか左門
を抱へて起つたのを高座から見たり、日ア、左様か少々申上げた
御座います、日ア、左様か少々申上げた事があるが此
へ伴れて参ります、日ア、左様か少々申上げた事があるが此
説教の濟までお待ち下さい、日ア、左様か少々申上げた事があるが此

龍虎双勇傳

遊ばせ亦厠から歸つて来て跡の説教の畢るまで待つて居る参詣
人は下足符をもつて歸る、彼の上人は水晶の念珠を捻ぐりながら
下へ降りて、日ア、奥様此方へ御呼止め申て甚はだ相濟みませ
んハ、ア坊ッちゃん、御座い升か何月のね出生で、横、此子は十
月の生れであり、升、日ア、左様かお一人り様で御座るか、横、ハ
イ一人で御座い升のボロリ、と涙を流して上人を、日、奥様斯
様な事を申す、我、田引水と申して自分の方へ水を引くと思召す
かは知らん、此子は劔難の相があり、升な、此劔難と申して針で突
いても劔難、鉄庖丁で指を切りまして、も劔難だ、此兒は劔死の相
おある、刃をもつて死ねはならんといふ之れは結縁といつて縁を
結んであるの、何うも通れられませぬ、御武家様と御見受け申し
て、甚はだ御勸め申し兼ます、御歸宅おありつたら、御主人に能く
女から御相談をなすつて出家得道をなさい、此見を武家と被成れ

龍虎双勇傳

は御自分が死ぬるばかりではない親御の御家先祖代々の家名に疵
を附るよふな事可御座い升之れは天の爲せる貴ひたから免れら
れません天の爲せる殃は免るべし自から爲せる災ひは避けべか
らすと申すのは事を未前に防く詞でその人に異見の詞何うして
天の爲せる災ひは免れられませう何ふんもに御家へ歸つて御
相談を被成そ種々に和尙が諭して呉れまじた涙に暮れた女房の
小棋が 棋有り難ふ存じ立歸つて能く相談を致しませうと禮
を述べ宅へ歸つて来る本夫の角之進は今御酒を召喚つて居る
棋只今歸りました 角チ、早いことであつた何うだい今日の
御説教は實に彼のれ上人は旨いものだらう 棋ハイ就いては少
や申上げたいたい事が御座い升今晚は御酒の最中明朝申上る 角イ
ヤ介意はない酒を飲んで居るから話りが聞ぬといふ事はない酒
は飲んででも飲いで聞くべき事を恥度聞く 棋何を言つて被爲

龍虎双勇傳

入るのです 角何ん花 棋實は御上人様…… 角上人、何んと
もうした寺の爲に頼母子が出来るから二本も道入つて呉れると
もうしたか 棋イエれ寺の無尽ではどぞいません 角幾干かれ
冥加に納めるといつたか坊主は世に慾張つたものはなり明け
六ツもかれ暮れ六ツもかれ銭ばかり慾しがつて困る 棋アレ又
た彼んな悪口と…… 決して然うじやア御座いません實は此子に
劍死の相があるも申し升からは是れは寧ろ出家になすつた方が好
いその仰せで御座い升 角ナニ劍死の相がある筈棒奴エ然んな
こそが知れるものじやア無い坊主に爲るなんて怪からんことを
言ふ奴花 棋だつて貴郎日遷様の仰せて御座い升 角ナニ日遷
殿がホー鏝でも夫りやア不可ん、何うも志賀の悴を坊主に爲る杯
とは怪からん奴花 佛教といふ者が熾んに成ると世の中の中を爲
て不可ん、因果である因果である此世の中は假の世の中であるか

傳勇双虎龍

も早速に寺へ行け杯と言ふから怪おらぬこそは坊主をモ一明日
から寺へ行くな今度寺から米を貰ひに來たら斷つて仕舞へ坊主
より桐か櫻の方が好い棋ナニを言つて在つしやる。流石に女房
も良人に勝つべき理は御座いませぬから只ハイ、其儘に成
つて仕舞う。翌日に相成りましても朝飯が濟んで角之進は御出勤
御我御飯は役所で召上つて夕景も相成つて歸られまじたが雨三
日の間は何うも御機嫌が宜しく相成つて見ると女は少量
ふ者で御座います。棋ア、一人に心配を掛け是れは私が悪
かつた。良人の前へ兩手を突へ。棋妻が了見違ひをい九りて何
共申譯が御座いませぬ。被仰る通り左門を出家を爲せることは思
ひ止まりませうから切望御勤辨遊ばして下さいませうに
良人の氣可休まるやうに頻りに手を突つて謝罪りました。其所で
まに志賀殿も悦んで其儘日を送つて居り升る内に此矢代越中守

傳勇双虎龍

細川家への御使者、此事は他の講談にもあり升から本郷には畧し
て申上げます。が抑も徳川家の祖先も申是も如何で御座います
が中興の祖と申すべきで御座います。後征夷大將軍二代秀忠公
万苦の内功を擧げて關ヶ原合戦の後は大將軍二代秀忠公
が御相續の上は大御所様と申して居りました。に御老年に至つ
ても國を思ひ先祖を思ひ遂に彼の瀬波戦記杯で申上げ外戦争を
起して豊臣を倒して萬代不易の徳川家となされまじたが未だ二
代様までは何事も定まつて居りませぬ。夫れを三代の將軍大猷院
殿のお徳に由つて是れ迄大廣間其他の諸侯が御着府、既に品川
御殿山迄將軍家自ら此日はお出迎ひ遊ばしたから土井大炊頭
其他の盡力か至くは三代將軍の御徳でも御座いませぬ。松平の姓
の前田、薩の嶋津、陸奥の仙臺、此三大名を始め其他盡く松平の姓
を頂だいて年々の参勤も譜代大名の襲ならんことで御座い外

傳勇双虎龍

尤も國主には老中が一人出迎ひましたが其町事は以前に異ならずと雖も尤も二代公の様では御座いません其國主大名も多くある中に細川家は幽齋の時に細川と言ふ姓を賜わり幽齋は丹後の國笠野郡田邊五万石の頃はいから歌俳諧を始め茶道と文武に名高いた家で御座いました然るに彼の加藤家を断絶の後豊前菊野郡小倉に於て十三万七千石の家を五十四万石取つて肥前の國飽田郡熊本に於て國替其細川の家は松平の御稱号並びに三ツ葉葵の御紋を下されたと自分の細川を上書き松平を下に書き櫻の紋に九曜の星を大きくして葵の御紋を小さく慕に染めて天朝と將軍は何れが重いかと争つたこの御座いまして其折も公儀と細川の間に立つて失策と爲たのが此代家で御座い其が爲に祿を削られ當主は隠居幼年の君を以て相續だけは許されまじ此際江戸家老を勤めて居たのが右の志賀角之進で御座

傳勇双虎龍

い舛が今度の事に就ては己れも責任があり舛から遂に祿を捧げ浪人と爲れ俸左門を連れて江戸表へ出て参り巢鴨の植木屋兵衛の許に逗留中角之進遂に一命終りました母と二人で居り舛の内に入り町人八丁堀岡崎町の嘉兵衛と言ふ者が將來に望みのある者必ず名を擧げるであらうと言ふ見極めを付けて彼の左門を世話をして居りました然るに運の悪るいは時は詮方のないものでありまして其年十二月八丁堀北嶋町ら火事を出て折節風激しく嘉兵衛の家は全焼と相成り箸も持たぬ乞食に成つて仕舞つたに由つて流石に嘉兵衛の所に厄介に成つて居る理由にも行かない別目的もない可此所を辭して母と二人り僅かの金子を保持つて那方の安泊此方の安泊に其日を送つて居る内座して喰へば山をも空しとやら忽ちの内は明日をも送れぬ始末と成り母の小楨は是を苦にして敢無き最後夫れも葬式も出すことは

傳勇双虎龍

出來いのであり升が宿の主人の情けにて湖くに野邊の送りを濟
ませ左門に於きましては今は便るべき家もなく便るべき人もな
く木から落ちた猿同様丁度十六の時でグズが然ふは宿へ厄
介に成つて居ることも出来なから然其所を出で諸々ウロ
ど徘徊爲て居たが腹は減て来るし寐る所は無し茫然來たのは丁
度兩國橋夜もハヤ正に九ツ過ぎ寒けき夜半の月影は浪の間に
映ふて肌を刺す北風に吹晒されつ左門は寒さに堪えられず熱く
已れの身を顧み左門ア、一淵は忽ち瀬と變る浮世とし言へ此有
様は何事ぞ世々世々であらば一國一城の主とも成る身信長様と同
じやうに天下に時めく三好の一族情けないとは斯ることを言ふ
のであるか被りし衣も檻樓にて人に見らる事さへ耻かしく……
エ、儘ヨ歎くまい何所の定的泊るべき家もなく今宵は遂
に野伏りであると思れも此身に定まる因縁ドリヤート兼入り遣

傳勇双虎龍

らうか。と大膽不敵の左門は風を除けて欄干の蔭に由り行末越方
を考へて居りました。が晝の勞れにトロく眠ることもなく現と
もなぐ致して居る折しも本所の方より一人の武士頭巾面深に着
流し姿、差閃かす大小の威風も崩る、微酔機嫌、節面白く、催馬業を
論ふ聲、音も水に響き、一歩は高く一歩は低く、踏々、踏々、千鳥足、此
方を差して來掛る折しも、バツタリ足に墮く者がある、武士は不審
に思ふた酔眼を開いて見れば、最も破れたる衣を纏ふ少年の足に
蹶いたのでぞいます、此少年とは即ち左門、武士は舌打鳴し侍
「エ、此乞食奴の心太くも天下の大道を我物顔に寐て居るとは、往
來の邪魔モツト其方へ寄らんか。と阿り怒りて行過ぎんとする聲
音に夢を破られけん左門は、菘を刎除けて起上り右手を延ばして
件人の武士の刀の鋒を確乎と握り左門見れで立派な侍だが扱て
禮義を知らぬ奴おな下駄を枕に青天井寐たる座敷は六十餘

樓勇双虎龍

州何んなに手足を延しても壁と言ふ邪魔物のない天下暗れての
野伏り境界壁へ狐一枚でも四方の圍は城廓同前夫れを何んぞや
理不盡にも土足に掛けて歌樂の夢を破りしのみならず邪魔者杯
一人の道ではどざるまい三間巾に百有餘間川に掛けたる此大橋
未だ三尺にも不足なる小きな身体の此乃公が寐て居やうと起さ
て居るりと聊か邪魔には成りやア爲めへと言返したる面魂い矢
知の橋の古事も漫るに思ひ出でられて件の武士は驚きなら月
の光りに能く見れば顔貌は獲れ九れども自然に備わる人品骨柄
選しげなる有様に彌々惘れて言葉無く心の内に思ひ升には武
「ア、天晴れなる童子である未だ漸く十五か十六の小兒ながら今
の言葉は道理至極彼は必ず日吉丸の英才秀智を有したる珍らし
き童子とこそ思われたり試みて見んや」と心に點頭少年の傍に

樓勇双虎龍

へツカくと進みまして言葉と和げ侍ヲ、道理なる汝の言葉
開も汝は何如なる者でありつる器量骨柄舌辨迄只物ならずと
思わるとに斯く淺問敷き委に落れしは何事か世に捨てられし
か世を捨てりか次第を一通り聞かせよかしと問返され左門は
莞爾とばかり打笑ひ左門御武家に對して心にも無き無禮過言然
るに夫れをも咎め玉わす御褒めに預る面目なされ世を捨てぬも
捨てられたる此身の來歴一通り事永くとも御聞下され勿論人に
は秘め隠す我身の上的事なれと袖摺合ふも縁と先ず一過り御聞
我身に得難き知己思ふ故今更何を包みませう先ず一過り御聞
なされて下さいまし申すも先祖を汚すに似たれと私しこそは阿
波の國正城三好長春の一家に父と家老を勤めて居つたる者
本姓は秋山と申し升が仔細あつて父より姓を替へ志賀と改め父
と志賀角之進と申し升折しも天下は麻の如くに亂れ優勝劣敗の

龍虎双勇傳

やら申すことばもあるに由つて拙者が世話をば致して進せやう
左門有難ふ存じ外見る影もない私を不愆に思召しての御話申し
けなくは存じ外見る影もない私を不愆に思召しての御話申し
たせ某しとは九州福島城主蜂谷公の臣にして指南番をいたり
たせ某しとは九州福島城主蜂谷公の臣にして指南番をいたり
廣瀬權太夫と申す者である此度殿江戸詰に付御供いたして當地
ふ参り居る者來春に相成らば又本國へ立歸らなければ成らぬか
ら其時に共に九州へ連れて参るであらう先づ當分は予が方へ参
り勤いて居れいづれ又時節も來つて花咲く折もあるであらうか
ら……と情けの籠る廣瀬の言葉左門は涙を流して左有難ふ存
じます重ねの厚い御言葉然らば何分御助け下さりまし木か
ら落ちた猿同様鳴呼捨つる神あれば助ける神ありとは此事か且
つ先方が御指南番とあれば兼て我望む所武術を覺へるには屈強

龍虎双勇傳

のこそである。心中飛立つばかりの思ひにて此所で廣瀬に従つ
て蜂谷公の御長家へ來たり先づ當分は仲間同様立働いて居る權
太夫は密かに左門を呼んで權左門左門へイ。權其方のしとを
左門と呼ぶと家中の者も不可んから以來は秋山猪助と云ふ其
ある者であらう杯と聞いて不可んから以來は秋山猪助と云ふ其
方の本名にいたせ猪助の方が呼ば好いから左門畏りました私
其方が結構でござい外、其所で秋山猪助武宗と云ふ權太夫が忠
義を盡して其合間には武藝學問に心を寄せて居る様子、其上大
量で言葉は少なく將來見込みある者善い者を抱へたと權太夫も
悦ぶことも限りなく翌年の春蜂谷公は本國福嶋へ御歸り成る猪
助も廣瀬の供を爲て九州へ参り猶忠勤を勵んで居る内扱てこそ
前回述べたる如く主人に武藝を仕込まれて大した腕前と成つた

百十八
のであり、然るに猪助不圖したことでより心得違ひをいれして廣瀬權太夫に不興を受けけるのれ話りは次に……

第七席

秋山猪助は廣瀬家に奉公を爲て忠勤を盡す傍ら權太夫から指南を受け僅か三ヶ年の内に腕前は充分に發達して今では師匠の代を考が出来る位、權太夫も悦んだが猪助も實に悦びまして猪奴を偏に主人の恩だ衣食住に差迫つて兩國の橋の上に乗居たも大したことで此家の爲には命を捨てても盡くさなければ成らん。猶も一心に奉公を爲て居る、スルと或日のことでございまして權太夫の妻が「猪助ヤ、猪ハイ御新造様御呼びなさいましたか、妻ア、……」那のねへ今日のはれ彼岸の中、日給荷給を拵へて御

龍虎双勇傳

家中へ配らりと思ふなられ前氣の毒だが豆腐屋へ往つて油揚を取つて来て呉れな猪、畏りました。猪助は岡持をブラ下げてスタ、豆腐屋へやつて来た猪、今日は亭主マヤ猪助さん何ん花い、猪、今日は稻荷館を拵へるんたらう花油揚を呉んねへ亭主ハア好うござい升何枚ばかり猪、サア失策つた數を聞て来たかつた亭主、其奴ア困つたね、毎年百枚位、花から今年も然んなもんで好からう猪、然上かい、ヒアアマア百枚貰つて往つて見やり亭主マア好いヒアア無いか猪助さん、今茶を遣入らアね猪、ナニ然ふ爲ちやア居られない主人の用で出て来て遊んで居ちやア濟まねへから亭主も無ふ花ね、前さんのやいな奉公人を持つつた御主人は仕合せだ、マア、精ね出したさい猪、有難ふござい升左様なら。と百枚の油揚を岡持ちへ入れて豆腐屋を出るまでイトロ、……イトロ、……と齋が啼いて居るから猪助チ

龍虎双勇傳

ヨイと上を向いて見ると一羽の鷹が此方に向いて舞ひながら啼
て居る猪養生乃公豆腐屋で油揚を買つたのを見やアがつ
て呉れと云つて啼いて居アると見へるヨシ
が何の位いに成つたか試して見や此頭評判の先生で佐々木岸
柳てへ人は燕返しと云つて飛んで来る燕を打つて落すと云ふ
どたぶ乃公ア夫れ迄の腕じアねへが那の鷹位へは打てるか知
らん。岡持から油揚げを一枚出して見せびらかして、鷹と云ふ物
は皆さん御承知の如く目の早い物で六十間も上から往來に鼠の
死んだの坏を見てサイツと降りて来ます、那の位い目の早い物は
ありません去れば猪助が油揚げを振廻すのを見て
堪らん物を持つて居る乃公に呉れるならう。と正逆思つた理由
では有りませぬまいか鷹はスイツと宙から下りて来て猪助の持つ
て居る油揚をサアツと凌へて逃げんとする

伊已れつ……云

龍虎双勇傳

ひながら伊助は腰に差したる木刀を取るより早く鷹を視へて
ツ視ひは過たつては打たれて大地に落ちバタ／＼羽叩きを爲
て居る其早業に往來の者は呆然に取られて世には恐ろしい人
あるものな武士も及ばぬ手並であるため獲め港へぬ者は無かつ
た位いであり舛去れば猪助の悦びは此上もなく猪ア！先生
の庇陰で吾も是れ九けの腕前に相成つたるか。と内心飛び立つば
かり然るに此廣瀬權太夫と云ふ方は何流だ。と云ふと眞影流の達
人でありまして槍は佐扶利流を能く使ひ食祿も二百五十石を受
けて家中の人々に先生に仰おれ何不足無き身ではあり升が子と
云ふ者ありません常に是を憂へて居りましたが權此り猪
助を吾養子として此家を譲らう。と云ふ思ひを話したから一日猪助を
小陰へ呼んで權權借て猪助其方に改めて話してある猪養生
何んでござい升、私は先生……で之無かつた御主人も無ければ今

龍虎双勇傳

頭は江戸で乞食を爲て居らなければ成らぬ身の上然るに御救ひを蒙つて無事に今日を送るのみならず武術もお弟子様方より御深切に教へて下さつて先づ御庇陰様で何うやら太刀筋を覺へま

龍虎双勇傳

て御受け可出来兼ねます 權奈是出来ん嫌か 權何ういたしまして勿々無い……… 決て嫌だの何んだのと云ふ次第ではございませぬが御常家の養子に相成ると何う爲てる氣に暖みが出ます……… 横着を掛へる次第ではありますから今三ヶ年の間花此儘御差置き下されてモ一充分と言ふ所で改めて御當家の御養子になすつて下さいますし 權成程モ一少つと修業を爲たいから此儘に爲て置て呉れる三年の後には養子に成る……… 宜しい拙者が明日が日腰が立んそ云ふ理由では無いから今三年位は稽古も出来やう然らば其三年の内には子が與儀を覺へて呉れヨ内實は養子であるぞヨ……… 權有難ふございます私も其積りで一心に勉強いたす

龍虎双勇傳

外の弟子に教へぬ所の妙手を教へる猪助も好める業故一を聞て
十を悟るからドン進む内に光陰には闘守無く春と無く秋と
無くハヤ三ヶ年の星霜を経ましたから今は猪助の腕も奥儀を傳
へんばかりに熟練いたりました、スルト猪助ヒヨイト不了見を起
し九と云ふのはモ一人かから来る門弟の内己れに及ぶ者無
い猪ア一有難へ主人の家へ来る弟子の内モウ乃公に叶う奴
等が一人も無くなつて仕舞うて此上は先牛と乃公と何方が腕が
上たらう一ツ試して見てへもんだ夫れも道場では面白くぬへ、隙
を規つて先生を一つ試して見てへもんだ夫れも道場では面白くぬへ、隙
に向ふが如き望みを起し九のが是れ猪助の生涯の過り折はそあ
らぬと待つて居る或日城中から夜分急に用ゐつて至急の御
召權太夫直様仕度をしていたりて權猪助と孝助二人へイ權御苦
勞が是れから私に登城を爲なければ成らん看板を付けて二人

龍虎双勇傳

で供を爲て来て呉れるやうに孝へイ畏りました。と其所で猪助
も提灯を持つて先きに立ち權太夫は大小を打込んでブラリと
行く跡から孝助が草履を持つてヒヨロ〜付いて来る懸て登城
を爲て二人の家來は玄關に待つて居る孝ヲイ猪助猪誰が然ん
孝汝エ旦那所の養子に成るつて評判だも眞實か猪誰が然ん
なこそを云つたい孝誰もつて籠棒奴エ……先生が饒舌になく
つたつて御新造が云わなくつたな己チャインと知つて居らア揚
殿が四知の教へてへことを知つて然んなこそを覺へて来た孝コ
なことを云ふアがつて何所から然んなこそを覺へて来た孝コ
一猪助白痴にするな何所から教はつて来たは情け無へ乃公たつ
て其位へのことは知つてらア養子てへ者は元々餘まり身上が好
く無へから輝に行くんぞらり何方か云ふア養子先まの方から質
子があるに違へ無へや其所で養子の方には貧乏を爲て居るから質

龍虎双勇傳

を置くことも何も覺ぬて居て男に若金子の無い時は質と云ふ物を
を寄置きなさい自分の品物を質物へ持つて行けば金圓を貸して
呉れて利息が一兩で一月二十四文六ヶ月出さねへと流れて仕舞
い升、彌々其時元金も出来なるつたら利息を付けて往つて利上
げ……猪何を云つて云へるんでへ 孝だからヨ養子も質
を教へると云ふのは夫れを云ふんだ 猪間違つて居るヨ然らな
生意氣な事を云なさんな間違つたことを云と却つて笑はれらア、揚
震の四知と云のは斯う云ふ理由なんだ 孝ハア然ら云ふ理由か
猪嘲弄へすなヨ店に揚震と云ふ人があつて…… 孝ウム 猪其
人がマア此方で云ふと御奉行様を見てへな役を爲て居たんだよ
孝成程 猪デマア或る人が曲げて頼みてへまどがあつて其揚
震てへ人の所へア口を持つて往つたんだスルト揚震と云ふ人
が正しい人だから其ア口を何うあつても受取らねへもんだか

龍虎双勇傳

ら其人も云ふには取つたつて好いじアありませんか外に知つ
てる人は誰も無へんだから取つて呉んなさぬと欺ふ云つた
孝ウム 猪所が揚震てへ人の云ふには夫は大きに間違つた了見
花誰も知らねへと思ふから不可ねへ第一天で見つて居る其
次に地で見つて知つて居る夫に和郎さんも知つて居るし私に知つ
て居る一寸四ツ物が知つて居るから受けることは出来ねへと云
つたんだ、其所で揚震の四知の教へど云ふ 孝へエ一分らねへ野
郎ひア無へか天地で知つて居たつて自分が知つて居つて外に
知つて居る者が無へたから遣らうと云ふ深切を無に爲ねへで
貰つて置けば好い慾を知らねへ奴だねへ 猪乃公に然らな怖
顔を爲九つて詮方がねへ 孝マアサ兎に角汝エ旨く入りやアが
つたなア先生の子にれば二百五十石の旦那其節には乃公
が馬を引張つて行くから頼よつ 猪誰が云つたか知らねへがマア

樓勇双虎龍

改めて披露する迄は人に黙つて居て呉んねへヨ 孝夫りやア好
いども……猪時に孝助に前の一ツ頼みがあるんたよ乃公ア
何んだコ一腹がキリくつて詮方な無へ今迄は我慢して居
たが堪らなくなつて來たから誠意に済まねへが和郎旦那に能く断
つて一人でお供を爲て來て呉んねへ乃公ア先さへ歸つて薬を
飲ろてへから孝ア、好いども外の事と違つて病氣を云やア何
うも詮方か無へ旦那つて何んともいふゆへから早く歸んねへ
猪じやア済まねへけれども頼むヨと猪助は腹に一物あるから
孝助に別れて城を出て猪今夜こそ一番先生の腕を試して見
やうと止せば好いの城下に來て端嚴寺と云ふ寺の墓地に這入
り木刀を抜いて今や來ると相待つたり頼て半時ばかりも待つ
て居ると向ふからテラく見へるのは桔梗の紋の付た提灯も待つ
廣瀬家の定紋 猪ハ、ア今先生御歸りたど見へるワイと墓の脇

樓勇双虎龍

に身を寄せて待つとは知らず主従二人 權孝助提灯を持つて然
ふ先まへばかり往つては不可んではなにか 孝へイ……此所ん
所は墓地で何んだか氣味が悪うございますから自然に足が早く
なつて任舞います 權白痴め墓地从何が出るもんか 孝夜な
く人魂が出るつて専ら評判でござい升 權ハ、ハ、下郎は臆病
な者であるワイと笑ひながら此方を差してれ出でなざる猪助は
主人をやり過して於て後から木刀を以て權夫太の肩先きを覗
ひ 猪エ、イ……と一壁叫んで打込んだ孝助は 孝ソラ出た……
こいふと提灯を投出してドンく逃げる跡は綾なす眞の間權太
夫は猪助が打込んで來る木刀をヒラリ体を變して空を打たせる
猪エ、仕損じたりと又も打込んで來る時に權太夫は怒れる聲
を振絞つて 權ヤ、何奴なれば卑性未練恨みあらは尋常に名乗
つて勝負ないたせ猪助は然んたことには構はない又も振下して

龍虎双勇傳

來る奴と又々ヒラリと体を變し手許へ踊り込んで拳を固めて急
所をビツツ突かれた武藝の名人に當身を喰はされて何堪りませ
や、猪助はウント夫れへ倒れる折しも今宵は雨模様でござい升
ら何者であり升お共狼藉者の面体が更に分らないから權太夫其
儘曲者を引抱へて己れの屋敷へ歸り燈火に隙かして見れば是れ
猪助でありますから一同アツ……と家内の者は驚いた中にも權
太夫は憤ること一方ならず直様活を入れ息吹返した所を見て
權「コリヤ猪助如何なる理由で汝は今宵斯る無禮をいたせしむ。猪
助は恐れ入つて遙ろ末席に兩手を突て首うな垂れ黙然たるはか
りなり。權「コリヤ猪助今宵の次第を申せ黙して居つては分らん
何うした猪「ハイ誠に恐れ入りましてござい升全く私の心得違
ひ先生の庇蔭様で先づ一通りの武術を覚えましては分らん
れす知れず慢心をいたり先生のお腕前と私の腕前と何の位いの

龍虎双勇傳

隔てがあるか不意を覗つて試し見んと今迄の御恩を忘れたるに
はあらざれど空恐ろしきことを思ひ立ち無禮を働き斯る始末何
そも面目次第もございませんと面目無けに又首を垂れる權太夫
は是れを聞いて歎息爲し權「借て吾は愚かなり人を見るの智
に乏しく汝如き者を有爲の者と思違ひ今日まで目を掛け遣わせ
り耻かしさヨ、最早何んにもいはん今日限り暇を遣わすイザ參れ
猪「ハムア……其御怒りは御道理でもござい升お面より心に巧
んでいたせしことに候わす一朝の心得違ひより御怒りに觸れ不
忠不義の段は重々不屈さには候得共何卒御勘辨遊ばして……
權「イン又ならん汝は獅子身中の虫とやいわんか我年來の恩義を
忘れ聊か見所ありと思ひの外歸館を伺ひ重々不屈に至極の舉動
言語同断、直ちに手討にも致すべきなれど格別の憐愍を以て暇遣
わすのである、サ參れ立て參らんぞいつかな動かぬ廣瀬權太夫

龍虎双勇傳

涙に暮れて廣瀬の屋敷を出て其所で袋町の孝助の所へ行き
「阿母ア一實は斯ふ云ふ理由でお屋敷を引縮つて仕舞ひましたデ
孝助さんの云ふには別に外へ好へ所がなければ乃公の家へ往つ
て居るそのこと斯う深切に云つて呉れましたから言葉に甘へて
えつて来ました給金を貰へば何うにか方法を付けますから夫れ
迄れ置きなすつて下さいまし。聞いて阿母も母マア……然ふです
か若氣の過り一時の了見違ひ語らないことを爲ましてねへ是れ
が外の人なら御断り申すんだけれども常々悴の申されるのは
私しの朋輩の猪助さんと云ふ人は大した人だ博奕は打たづ花は
引ぶづ遊ひはせず間さへはれば本を讀み劍術を稽古を爲て居る
中間奉公なとを爲て居るには珍づらしい人だ。孝助の話し私く
ひも感心な人だと常々から思つて居りました。御遠慮は入りませ
んから家にお出でなさい。と云ふ猪助も大きに悦んで居りました

龍虎双勇傳

さて翌日になるも孝助が追つて来たり孝サア猪助さん此り
和郎の給金は是れを常々貰ひ溜めて置いた奴を旦那に預けてあつ
たの五兩兩方で二十七兩も二分二朱あらず猪何も孝助さん
何から何まで有難ふ存じます孝就ち又元猪助さん只此儘此金
子で茫然遊んで喰つて仕舞つち又元の目阿彌になるテ何か
此金子のある内に方を付けばなるめへ何んか商賣を始めたら
何んなんもたらう猪成程……何を爲たら好いたらう孝然ふ
ヨなア素人出来るやうな商賣は……ハテナ……阿母ア何が好
いだららなア猪助さんのするやうな商賣は……母然ふさねへ
何爲る今迄商賣を爲たことおないんだから手の掛る商賣は出来
ない時に丁度此町には菓子屋が無いから見世を菓子屋らしく拵
へて餡菓子仕込んで近所の子供に賣つたら何んなんもたらう
孝此奴ア阿母ア好い考へた何うだ猪助さん猪何んにか番太

龍虎双勇傳

郎染みて那奴ア老人のする商賈だ小哥等のやうな若へ者がする
商賈ひア無へ孝夫れも然ふだなア……コイツト……ヲ、好
いこそがある和郎旦那の髪を平生結ぶと無へか旦那猪助は
髪を上上げるのは上手だ怒少な髪結床へ行くよりは櫛が柔らか
好いとコイ言つて居た第一髪を剃るにも痛くなくつて好いて褒
めてお出でなすつたが髪結の道具を買つて此所を一間床場
へて髪結を始めたら何んなもんだらう乃公の子供の時分
友達が大勢居るから一廻り巡つて給んで歩いてゐるら……然
ふ為たら喰ふ位への事は平氣だらう猪助程孝助さん言ひ
を考へて呉れたじア然ふ言ふことに爲ませう……阿母ア
髪結が好いなア母極く好いな第一髪結と言ふ商賈は餘
る商賈で益暮れに貰ひがわつて冬分にならと炭錢が貰へる
な餘餘は私が貰つて仕舞うヨ孝徳張つたことを言いなさん

龍虎双勇傳

な相談一決して二十七兩某の金子で大工を入れて見世を推へ
て櫛鏡盥鉢刀剃刀杯残らず買調へ残つた金子は常分の食料に孝
助の阿母へ預け孝助町内の若い者へ頼んで廻る甲何うだい
吉孝助の家で今度髪結をすると言ふがビラの一枚も掛げてやら
ざア成るめへ乙然ふヨ騙つて遣らうじやア無いかと町内の若
衆からビラに金子が如何位が付て居る扱て當日になるも皆ビラ
を配る位に花から一通づゝは来る來てやらして見ると中々上手
花他の髪結床は遠く及ぶ所無いかから皆んな引續いてゐつて
る去れば見世も繁盛を爲ますに由つて阿母も悦ぶ孝助も悦ぶ
人も至極悦んで今日を安樂に暮らして居りました可成り
ア「猪ア、一語らねへことになつた了見遣へさへ起さなければ
今頃には二百五十石の御指南番人に先生とか何んとか云はれる者
が人の垢を舐めて今日を送るは何事だ是も皆んな先生の爵だ

龍虎双勇樓

夫に就けても廣瀬のお屋敷には言譯がない江戸で助けて頂いて
此方へ来てからも一方ならぬ御恩を受け御切親な思召を仇で返
した此始末ア己は何う爲て那んな心に成つたのか知らん旦那
は何う爲てれ出でなさるか御新造様は何んと思召で居らせられ
るであらうと明暮れ廣瀬家のことを忘れる暇は更にない却説是
れから廣瀬權太夫の身の上にと就て少しの暇は更にない却説是
次回の御預りも爲ませう

第八席

高木林中に秀づれば風是れを嫉む廣瀬權太夫は蜂谷公の臣に爲
て二百五十石の録を頂き何不足なく弟子も多く取立つて居り升
と爰に同家中に同じく御指南番で百五十石を頂き北辰一刀流の
劍者秋田軍左衛門と申す者があり升未だ此頃は天下は泰平に成

龍虎双勇樓

つたとは云へ戦國の跡でゲスから諸大名劍者と云ふと録を客ま
づ是れを抱へましたもので去れば徳川十五代の内で寛永の位
好い劍客の出た時はない即ち柳生飛驒守であるとか荒木又右衛
門源義村宮本武藏佐々木軍刀齋巖柳であるとか皆寛永年間に出
た人であり升閑話休憩まして彼の秋田軍左衛門と云ふ人物は同
じ家小で廣瀬が二百五十石己れが百五十石……百石の相違があ
るから何となく心持悪しく且つ己れの方で弟子と云ふ者はない
廣瀬の方は導揚に於て竹刀の音は絶たこそありませんから何
か事かあつたら廣瀬に耻を擡してやらり何も彼奴と乃公と腕が
違り理由じやア無り百石の相違と云ふ物もあるものじやア無
年で録が取れつこじやア八十九になれば千石位に昇進する筈
だ斯んな筈棒な話じがあるものじやア無り餘り胸の好く無
人であり升おら一考へて居たスルと其年も過ぎて翌年正月十

龍虎双勇傳

二日のこと、朝からドン／＼降出した雪其所で蜂谷の殿おら御法
令がでて今日城中に於て雪見の宴を催すから皆一同出仕いたす
るりに云ふ當今で云べば新年宴會でありませうか其所で家中
の面々大悦び八ッ頭には追々集つて来て奥の大廣間に於て庭の
面々眺めながら此酒宴正面には殿様左右には録高に由つて順に
居流れて居る殿様は家中の老家の面々を御覽遊ばりて殿今日
は好う集つて呉れ九庭の雪を肴に過さして呉れますやうに一同
「エ、エ有難き仕合せでござる殿今日は無禮講であるから少々
位いは躍り狂りと雖も苦しからづ一同隠し蓆を出し升あうに
一同へ、エ……」と云つたが正逆殿様の前で雨シヨボも踊れない
悦んで一同酒宴を始め始めの内は膝を崩さずに正しい話しを爲
て飲んで居たおソレ追々酒が廻つて来るに所謂狂ひ水一杯人酒
を飲み二杯酒を飲み三杯酒人を飲むと云ふモ一酒に飲まれて

龍虎双勇傳

仕舞うやうでは往生で各々然ふなるも性質の本生を現はし理屈
を云ふもなれば笑りもあり踊るもあり其騒動一方ならず殿は面
白い方て入つしめるから笑つて是れを御覽遊ばりて居る然るに
彼の秋田軍左衛門兼て廣瀬を心憎く思つて居り升から酒でも飲
ひと猶更殘念になつて来るを見へて己れの席より上座に控へた
權太夫に打向ひ舌なめ摺りを爲なむら軍コ一權太夫殿……イ
ヤサ廣瀬氏 權此リヤア秋田氏何んでござる 軍何んでござる
では無い酒の席に然ふチキンと座つて居らんでモ一そつと御醉
ひなすつては如何一盞献上いたそらではござらん 權思召しで
はまざるが手前御承知の如く生得下戸でござつて御酒を頂戴出
来ませぬ 軍「マアサ然ふ云はんで一盞 權然れば一盞頂戴いた
すでござる 軍時に廣瀬氏御身は神影流拙者は北辰一刀流……
何りも貴殿の流義をくさしては濟まんが神影流杯を申す劍術は

龍虎双勇傳

らまともいやす。斯る酒宴の席に武藝争ひ大人氣無いではござらんか。軍ハハハ、切ては廣瀬殿は拙者に及ひも無きことを知つて逃げなされるかヤレ。〱卑怯な御所存でござる。と云われて今は廣瀬權太夫堪兼ねたから。權此りア怪からんことを云ふ然らば仰せに任して何んたりも腕競べをいたさん。軍ヲハ心得た然らば。〱。と云ふので兩人立上つて向へ立出でる。家中の面々ハ此りやア面白。いことに成つた。見て居る中には心ある者は秋田の廣言を憎しと思つて思ふ様引叩いて呉れり。ア好いと思つて居る。雪中の中へ裸足の儘で飛下りた二人は冷たしと思わす。木劍を取上げて左右に別れる。一禮をいたして權太夫は片手青眼軍左衛門は大上段に振彼つた。權太夫失禮な奴だと思ひました。が詮方が無い。屹身搦ひに及んで隙を伺つて居りました。が如何にせん。酒は大嫌ひの所へ持つて来て軍左衛門の奸計に落ち強て

龍虎双勇傳

大盃を傾けたものですから。腦神錯亂して目はグラグラ。〱と廻り木劍の先まが幾振りにも見へる。權アハ。此りやア飛んたま。成つた旨く彼の策に乗つた。ア。と心中大いに怒る。軍左衛門は兼ての大酒で斯くあらんと思。うから少し加減を爲て居る。隙な者の加減を爲た。めは嫌ひな者の飲過ぎたんで。すから大變な違ひでござい。升軍左衛門權太夫の太刀先さを見て。造化精妙と勢ひ込んで打込んだ。若手の腕前受けんと爲した。る機みにヨロ。〱と眼へてズドンと大地へ倒れる。所を乗込んで肩先さをピシツ。權參つた軍ヤレ。〱。權太夫殿の劍術は彌々。畠水練と事定つたり。各々如何でござる。此方が二百五十石。〱。拙者が百五十石。〱。ア。千里の馬なりと雖も。是を見出す。伯樂無くんば千金の價ひ分ら。づ太公望も時來ら。づんば東海の岸に釣を垂る。イヤ。賊に是非も無きこと。でござる。アハハハ。〱。と軍左衛門は大口明いてカタ。〱。打笑ひ已れ

龍虎双勇傳

の座に來つてガブリと飲んで居る一同の者は彼れの大言を
心惜むと思わぬ者は無い殿も無禮な事を申す奴であるとは思つ
たが今日は無禮講故御咎めも成らず其儘に相濟む權太夫は潮く
に起上つたが面目無さに己れの座も戻れず其儘病氣と言立つ
て屋敷を差して立歸り口惜涙に暮れて居りました扱て家中の若
侍は是れを聞き軍左衛門の巧みとは知らないから全く軍左衛門
の方が腕前の立優つて居るものと考へ吾もくそ廣瀬方を退つ
て秋田方へ弟子入りをするモノ今では二人か三人の弟子で導場
も淋しい故に君前へ御指南に出るも面伏せたり升から
る耻辱を受けながら食祿を食んで徒らに閑居するハ武士の本意
に非ず一度當家を辭し他日國家にまゝ起らは速かに馳返り一命
を抛つて君の爲に盡さんと流石武士の魂い早くも斯く決心をい
たして一先は病氣保養の爲と言上りて攝州有馬へ湯治の御暇を

龍虎双勇傳

希ひまひた殿にも其心根を察して不惑に思召し殿悠々湯治を
いたして參れ屋敷の儀は堅く守らせ置くであらう必ず心配いた
すな儘有難き仕合せ……そあつて君恩の辱け無きと落涙に及
び一度家來の暇を遣はり妻を連れて永く住馴れたる福島の城下
を出立に及び豊前小倉から船にて大坂へ着し扱て大坂へ着した
は時にも正寶元年の夏であり升大坂中の嶋御藏屋敷御留守役中
井慶左衛門に面會して一別以來の挨拶終り先づ當分は此所に宿
泊すること定めて天満天神の社に詣で武運長久を祈り天神橋
を通り城外の景色を眺め豊臣公の政果無きを歎し是れを去つて
道頓堀に至り芝居の景況を見て生玉高津の宮を拜し住吉神社至
つて操を返へぬ松の景色を打眺め日々那方此方と凡ろ三十日
かり見物して夫れより京都に至り禁裏を拜見なさんと志し中の
鳴を立出でと伏見をさして趣まました爰に伏見に名高き金満家

龍虎双勇傳

山城屋四郎兵衛と言ふ家は己れの親戚でござい升からは是れへ来て止宿を爲て最と鄭重なる扱ひを受けて居りましたか商賣は人形屋でござい升二日ばかり厄介に成つて居ると三日目の八ツ頭をいのころズット見世へ遣入つて来たのは一名の立派な侍家來を二人連れて船の羽織に立派な衣類侍許せヨ四郎入つしやいまし侍ア、一國への土産にいたすのであるから人形を少つと貰いたい四郎長りました子僧やお茶を持つて来た子僧へい是れから色々買物を爲たが丁度十五兩ばかり買つた伏見人形を十五兩と言つては大したことで四郎何うぞ此方へ入つて下さいましと奥へ通して酒肴を出し馳走をいたしました東京でも當今大丸屋だも越後屋へ往つて買物をすれば何圓以上は御馳走をすると言ふことに成つて居る此山城屋も十兩以上の客へは御馳走をするのが家例に成つて居り升去れば彼の侍は充分の馳走に相

龍虎双勇傳

成つて侍イヤ大きに馳走に成つたと一禮を述べて立歸りました丁度其夜も三更の頃家内は一同寐静つた折しもあれドンと表の戸を激しく叩く者がある番頭が起出で番エ、誰方様でござい升お侍イヤ番頭参つて買物をいたした侍であるがノ番へい侍未だ少々買物が残つて居た明日にいたせば好いの花が明前に立ちたいの花に由つて夜中甚花氣の毒であるが明けて呉れるやうに……番へいと言つて番頭の人見を明けて見れば紛ふ方なき晝間の客送ウツカリと番ハア左様でござい升か只今……どガチ〜ガラ〜と明けたズいと這入つた侍滑したる刀をサツと抜き侍番頭静かに爲る番ゲ〜ツ……と言ふと早腰を抜かりして仕舞つた奴を手早く縛つて大黒柱に括し續いて這入つて来たのは晝間の供甲れ頭旨く行きましたねへ侍ウム上首尾だ。と夫れより見世の者を残らず縛つて奥へ参り

龍虎双勇傳

四郎兵衛始め殘らずを縛つて金子を探して居る、四郎兵衛の次の
間に寐て居たの可權太夫此物音に目と覺して何事なるかと様子
を伺へば正に賊、大まに驚いて早速寐衣の紐を堅く締め枕許に置
いたる一刀を持つて夫れへ出で來り 權己れ賊共覺悟を爲る。と
躍り出たした子分の奴は驚いたが何を……と言つと刀を抜て切
付ける、ヒラリト身を變じて置てトン／＼と當身を喰わされまし
たから忽ち夫れへドント倒れる、權太夫早く家人の紐を解て
權四郎兵衛どのは何れに參られしか 甲「ハイ、賊の頭を覺しき者
そ一緒に藏へ參りましたと言ふ其所で直ちに藏に至つて 權己
れ曲者何をいたす。と彼の賊の首筋を掴んで捻じ倒し肋骨をウ
んと一ツ突いたから頭も其儘息絶へたり亭主四郎兵衛は其所へ平
伏して 甲「最前よりの御働さ實に感服の外は無く有難き仕合せ
でござると禮を述べると 權「イヤ其御禮には及ばぬことサア、

龍虎双勇傳

方へれ出でなさいと賊の襟髪を取つて座敷へ連れ來る、家人も只
其働さに感服いたして居りました所で申聞けるには 權「コッヤ曲者
本に活を入れて蘇生いたした所で申聞けるには 權「コッヤ曲者
其方は何れの侍の果か斯る悪行を爲して諸民の難義を來たす、重
々不屈き至極に付此儘に奉行所へ引渡す筈なれど此後改心いた
りて夜盗を止め正しき業に就くとあれは吾等が主人に乞ふて法
に資本金を恵み道はさん返答如何に……と云はれて曲者は前非
を悔ひ恐れ入て首を垂れる是れに由つて金子百兩を權太夫亭人
に乞受けて彼の者に差遣はす、賊は嬉し涙に暮れて打悦ひ 賊「冥
賀至極何とも御情けの御取斗ひ御禮は言葉に盡し難く此上は正
業に就て折もあらば御恩を報ずるでございませうと云ふ其所で
二人の者も活を入れて蘇生らせ三人の者を放ちました、三人
は有難涙に暮れて此所を立去り、權太夫の情けに心を馳して正業

龍虎双勇傳

に就きまし九から伏見の金満家は漸く枕を高く睡ること可出来
まじ九去れば伏見に於ては専ら權太夫の腕前を大評判扱て廣瀬
は思はずも此地に長逗留をいたしまし九から京都の見物を後に
ひて一先づ攝州有馬の温泉へ参らうと四郎兵衛一家の止めるを
辭し暇を告げて伏見の驛を立出たり妻を連れて有馬の温泉宿
有馬屋喜兵方に投宿し及び幸ひ客も深山無いから心長閑に保養
をいたして居りまし九は是れより猶奇談に移る……

第九席

此方は秋山助助武宗は孝助の世話で髪結床を出しまし九所追
々ど繁盛に及び先づ今日を無事に暮らして居る内に故主廣瀬權
太夫が斯ふ云ふ理由で乃公は御暇に成つたを歸つて來九の孝
助聞て大きに愕きまし九がモ一權太夫は出立を爲た跡だと云ふ

龍虎双勇傳

猪ヤレ〜残念なことを爲たモ一日早ければ九牛一毛御顔な
けも拜したものをモ一御出立とは情けないと思つたが詮方がな
い心ならずも其日〜を送つて居る孝助は主人の所を暇を出さ
れて家に遊んで居る猪マア孝助さん利郎にもいろ〜厄介に
成つたから當今遊んで出で小哥も一生懸命に稼ぐから孝た
る生若い見空で只茫然と遊んで居るのも勿体無へから何か乃公
のするやいな仕事は無からりか知らん猪然ふサ、ヒヤア水でも
汲んで客の頭でもすいて呉んぬへ。猪助が下ズキを爲て猪助が
結ふ數倍出来るから困らづにされる内に今日と立ち明日と立
ち正寶二年の春のこと男今日は何……と遣入つて來九のは吉五
郎と云ふ人猪マア吉さん御珍らしい何日御歸りに成りまし九
ぬ吉漸く昨日歸つて來九のサ、イヤ大山と云ふ山は大した山だ
猪ハア然ふですかマア何爲ても好いことをなすつた行らた

傳勇双虎龍

つて中々行けるものじやア無へ 吉方々見て来たヨ大坂は勿論京
見物爲てお出でなすつたかい 吉方々見て来たヨ大坂は勿論京
都も見て来たたり賃は江戸を見てへと思つて居たんだが逆れの中
に江戸へ行くも何日歸れるか知れねから江戸は又後にしての
しと斯ふ云ふ奴もあつて遂々見づに仕舞つたが後は大抵見て來
たヨ猪ハア然ふですか 吉時に猪助さん……ヲイ孝さん利郎
達の元の御主人と云ふは確か廣瀬權太夫さんと云つたね 爾ハ
ア何んか話しがありませんしたかい 吉れた前大層な評判ナ其旦那
の評判が……猪助は孝助と供に膝を進まして 爾下何處でね
吉何所でつて和郎伏見でお前達の元の旦那が是れ云々で賊
を二十人退治したヨ伏見へ云つて廣瀬と云ふア泣く子も黙る位
へたど兎角人出は大きく話して爲たいものに見へる二人は悦ぶ
中にも猪助は猶更に悦んで 猪悪い噂さではなく然ふ云ふ噂さ

傳勇双虎龍

は何より御手柄のことであるよ心中飛立つはかりの思ひ固より
猪助は一旦は了見違ひをいたした可明暮れ主人の恩を忘れる暇
はない吉五郎と云ふ人が道中の土産話しを爲て歸つた跡で猪助
は孝助に向つて 猪扱て孝助さん今吉さんの話しては旦那は伏
見にお出でなさるとのこと何うか伏見とれ出での先きが分つて
居るなら一遍御目に掛つて昔の御託を申上げ旅の御苦行を思
めて差上げたく私には伏見へ行きたいが何んならう 孝夫
り又ア好い考へた那の儘御別れ申ひち又ア和郎も定めて心持
が悪るからう伏見へ往つて御目に掛つて來るが好い。其所で仕
度をいたして當分世を閉めて人々に名残りを惜しみ近所には
伊勢詣り云ひ拵へ上方を差して發足を爲ました住なれし福嶋
を跡に痕かしく豊前の岡崎より渡海して淡州福良に着き須本を
經て庵屋に出で明石に渡たり舞子の濱を打過ぎて須磨の名所を

龍虎双勇傳

見ながらに兵庫の町へ着きにけり、神ならぬ身の悲しきは故主、
は此所より遠からぬ有馬にありては、處知らず又も此所を出立し
て大坂を差して登り、ましたが大坂は日本第二の都會にて、町々の
繁盛は更らなり、川口には入船出船夥多、くしく色町の光景、道頓堀
の芝居の有様、流石久しく九州に居た悲しきには、見るもの聞くも
の珍らし、く其賑わい、おさは言語に述べ難く、猪助は「猪ア……大
九所を、乃公も久しく江戸に居たが、繁華は江戸に劣らぬ所と思は
づ知らず、二三日と日を重ね、斯くてあるべきで無いか、其所を八
おら船に乗つて……尤も夜船であり、升合櫻の宮、長濱の渡船場
も知らず、淀川筋を次第に、逆つて行く此六十石の船と申
すは、徳川幕府の御朱印免許にて、川筋近在の士民等が船で酒肴
子等を此三十石船へ賣りに来て、客に強る三十石に就ては、能く
語家杯が、あり升が、お話しが、色々あり、向ふから商ひ船を漕い

龍虎双勇傳

て来て、突然客船を見ると、其奴は健繩を掛けて、甲「ア乗合の人
々、ヨサア餅食はんか……酒食はんか、名物の鰯汁も食はんか、ど
云ふ俗に食はんか、船と申して、客に悪口勝手次第と云ふ、徳川幕府
から御許しが出て居り、升昔しは怪おらんことを、幕府で許したも
んで、尤も三十石の乗合は窮屈であり、ますと寝ては、申差の目差の
如く、起きては、掛の内に入れたる芋の如く、武士も百姓も押合ふて
一夜のことであり、ますから、我慢を仕て居り、升此物賣りの聲
を聞て、皆一同に起上り、菓子を買ふ者も、あれは酒を買つて飲む
もある、中に秋山猪助は、酒を一合買つて、飲みながら、一ツ服しやう
と煙草入れを出し、煙管を出して、吸れうとする、管がつまつて煙
の来ない、據ころ無いから、紙を捨つて、小捻となし、羅宇を通して、其
脂の付いた紙、心を捻を河の中へ、パツと捨てやうとする、と間違ひの
起る時は、詮方がないもので、隣りに座つて居たの、片鬚奴の薩摩

龍虎双勇傳

武士其侍の頭へ紙心捻がバツと乗りました此侍は五人連れの向
ふ見す薩摩武士と來ちやア堪らない 甲「コリヤ若者」猪へい
甲「へいではないワ何故に拙者の頭へ斯る汚き物を乗せた猪助は
吃驚して猪ヲヤ此りやアレ武家様御勘辨を遊ばして下さいま
し途河の中へ入れやりと存じ投げたのが貴殿の御頭へ留つた
のでございます 甲「ヤレ己れ替へ我頭に觸らすとも頭を越して
向ふへ斯る物を投げるとは不屈者況て我頭に投けたる奴武
士の面を汚す不屈奴故千万許し難し手討にいたす覺悟をせヨ赤
鬼面の顔に烈火の如く怒鳴りて止まず乗合の人々は俄かの騷動
に狭き船中の事とて大ひに狼狽いたし皆口々に早く船頭船を着
けヨと罵りたり此時秋山猪助は猪ア、一大幅なことをいたし
た、今此所で切合ひをいたして彼れに勝つたる所其筋へ出て彼
是れ暇費さば御主人は又何れへ行かれて仕舞うも知れず去れば

龍虎双勇傳

此所まで來たる甲斐もあるまじ、又向ふは五人であるから勝たば
好いが負けたる時は此儘淀川に寂滅爲樂、大事の前の小事である
から何の災うにも勘辨して貰ひ上策である。胸に感へて夫れ
に平伏し猪御武家様其御怒りは御道理ではござい升る全く私
の不調法宿意あつていたしたと云ふでも無し何卒御勘辨遊ばし
て一命を御助け下さらば生々世々の御仁恵有難く忘れぬさすも
涙に聲をうるませて兩手を合ひて詫入りましたが彼の侍は甲々
聞容れず、甲「イヤ、何んぞ申されるとも此耻辱は許し難し斯
うして呉れる。猿臂を延して猪助の襟裳ムンズと掴み胴の間に
敷きある筈に鼻を磨りました流石勘忍強き猪助も今は少しく色
を變へ猪武士は情けある者なるに詫るも即ちぬのみならず斯
る傍若無人の行ひ、所詮逃れぬ此場次第吾も元は武士の末、尋常
に勝負を遂げんと覺悟を極め身を起して武士に向ひ猪斯くま

龍虎双勇傳

でござ申上げてお許し無きは據る無しイザ御相手仕らん陸に上
がりてイザ某しの腕を試し見よと云へは五人の侍は大口明て打
笑いの根留めて呉れんと互ひに言葉番ひ内に船は伏見へ着さま
息の乗合の衆は飛ぶか如くに岡へ上り甲ヤイソレ血の雨が
降るぞ大變ぞとワイく云つて騒ぐ猪助の腕は思案して猪
ア、此場に及ばは伏見の露も消ゆるとも相手五人とあらば耻辱
万一我及ばは伏見の露も消ゆるとも相手五人とあらば耻辱
にあらずと心を極めて見れば別に怖いこともない充分に支度
して櫓十字に綾なして白綾懸んで後鉢巻用意は出来たが五人
侍は未だ船中から昇つて来ない猪アイヤ五人の薩摩武士早く
來つて秋山の腕を試さぬや何をグズくいたして居ると阿波の
國海部氏吉の鍛へたる細身の一刀抜き放ち河の岸邊に仁王立に

龍虎双勇傳

突立上がり船中白眼んで控へたり船中に居る薩摩武士は始めの
勢ひに似もあらず其勢ひに惚れり暫く後れて漸く其所へ出で
來たり侍ヤ一其所退くな不屈き者我々刀の錆にりてやらん
ど一同退れ四方より切つて掛る猪助は心得たりと丁々發矢廣
瀬權太夫百年来仕込んたる手練を現はし前より切付し太刀を潜
り空虚を切らせ肩口より大袈裟に切下げたり此時早く左右より
一度に切つて掛る奴を猪助は物の數もせず右の力は受拂ひ力
量に任して横に薙げは見事胴切り二ツになつて倒れたり左りの
刀は餘る力量で叩き拂ひましたから水もたまたま逃去らんといたせ
次にけり此勢ひを見て残る二人は迎も叶はず逃去らんといたせ
と猪助は早くも是を見て猪己れ友の討たれを見つて逃ぐる
は卑怯の腰拔武士序でに冥土へ遣はしやらんと馳せ掛り見返る
所を何んの苦も無く一人は眞ッ向より空竹割り又一人は腰の番

龍虎双勇傳

ひより切下げたり手の牙へたる故か止るを差すの手間入らず最
前より見て居りまじした船頭
ふ猪助見返つて猪コレ
「ヤーイ人殺しだ」と馳けて行く
「人殺しと云ふ法があるか」と云
「見ました六人を切つて袈裟掛けに切つて落した此奴が一番白痴
明け所へ見物人の内で役所へ知らした者があつた
助は邊りを見返つて猪御殿に召され各々方侍を捕るには國法
の掟ある者何んぞ理不盡に繩を受けんや吾も一本差の武士であ
る元は阿州公の藩中廣瀬權太夫の家來秋山猪助武宗なり夜前船
中に於てのつひさならぬ武士の意氣地より今尋常の勝負を果せ
し所なり御法を犯せし罪は無し法を持つて召連れ玉へ」と云へ

龍虎双勇傳

一同聞かばと多勢を頼んで理不盡に搦め取らんと癖き合ふ其
強勢に僻易せづ猪助は天を仰いで歎息を發し猪ア、一我運命
も是れ迄なり日本魂い此場にありて獅々奮迅の怒りを爲し氏吉
の太刀を眞向に振舞して猪ア仁義を知らぬ狗侍い死人の山
を築かんと呼はりながら當るを幸ひ縦横無盡眞向梨子割車切り
火花を散らして切り捲る捕手の多勢は打重り突棒又又袖搦み長
道具を以て取掛るも猪助は阿修羅王の荒れたる如く死力を盡し
て此所を詮度と秘術を振つて薙き立てる去れぬ其及先きた掛つ
て切伏せらるゝも數知れず血煙り立つて見へました捕手の面々
は流石に少しく開け渡つて見へたりける由つて奉行所へ早馬を
以て此趣きを知らせたからソレと云ふので捕手の應援として淀
藩本田侯の家臣大勢此所を線込んで來り遠巻きに巻つてツツ
と云ふ聲は憶病にも又凄じく猪助又々愛に勇猛を逞ふすると云

傳勇双虎龍

よ豪傑荒場の一席……

第十席

百六十四

大勢の者長道具櫛子等を持つて四方から追取巻く猪助は此体を見て猪ヤア又してもこんなまくら武士物々しき其振舞我一人の手並に恐れて卑怯の振舞止千萬……と屹度四方に眼を配る折から後の方より修験者体の一人十徳を掛けたる大の男子茶椀の大きな奴に茶を汲んで持来たり僧ヤ一秋山殿とやら我は旅の僧でござる今朝よりの大働進ん一息吐いて切掛け玉の御難義を察し佛道施行の此茶を進ん一息吐いて切掛け玉のく落延び玉ひと猪助の身近く差寄りたり猪助は回顧つて御早猪ヤ一浅果敢なる其計畧何んぞ其手に乗るべきやと云ふよ中へ飛落ちけり此早業を遠見せし橋の此方の捕手等は只モ一

傳勇双虎龍

を潰して押へたり此時馬上に押へたる一人の者は甲如何に武術に優れしとて只一人位いの敵に斯く手間取るは言甲斐無き者共かなソレ用意の長櫛子で組み橋の此方を立切れッと呼わりければ一同は手に手に差圖の如く数丁の梯子を杵形に組み手にしと取り固め秋山來らば長柄を以て突き留めんと構ふ内にハヤ四ッ過ぎに相成りまし見物はワイく伏見の里は上を下への大騒動迎も取るこそが出來ない云ふのでありまして一度休息を遙か遠くに退いてグルリと圍み用意おさく怠る無く守りたる有様は凄じく猪助は今身綿の如くに勢れ腹は減るしモ一倒れるはかりなれども此所で一生命を前後に心を配つて叩へたり彼は一時はかりなれども此所で一生命を前後に心を配つて叩へ手筈を併せて秋山の勞れに乗り一擧に費め取らん又以前の如く酒樽を轉し掛け猪助の身体を桶狭みに爲め取らん又以前の如

百六十五

龍虎双勇傳

山は固より死を極めたる決戦なれば又も勇氣百倍勝り、寄手は挟みしと思の外酒樽の上に乗上り鐘の如き面相にて猪ヤア取手の指押淀の流士能く承われ又しても飽まで理不盡の振舞侍の耻ぢも知らぬ白痴武士幾百人と雖も塵しに爲て呉れんと云ひながら又も氏吉の名刀を翳し右に慈ぎ左りに走り捕手の面々手傷を負ふ者數知れず猪助は飛鳥の如く飛廻り居から流石に近寄るまも成らず過にし昔し御曹子牛若丸が三條橋上にて辨慶と試合せしも斯く又あらんと思ふばかり、モ一近寄る者が無い、から橋の中央にホツと息吐いて居る此時捕方の一人 甲アイヤ各々モ一力責めは無益なり柄を築いて兵糧賣めにするの外無し此儘嚴重に打搦へて彼れ饑渴に及ぶ頃其弱りし所を捕つて押へる外は無い 乙成程夫れが宜しからん斯く一人の爲に大勢の人數を損ふは残念の至りであるとその所で又も又兩側より數十の桶

龍虎双勇傳

を成み嵩ぬ晝夜の別なく嚴重に取圍まじりた秋山も是れには閉口爲まじりた初め五人を切つた時から未だ飯と云ふ物を喰べない一滴の水も飲まぬ始末内に其日も暮れて仕舞つた四方は霧をたき用意れさく怠り無く全で火事場の如き有様然し猪助は寐もやらず橋の上に一夜を明かし翌日に成ると又例の如く四方から賣掛けて来る猪助も空腹で堪らんとは言ひながら一ッ間違へは繩目を受けなければ成らんのだから少しも驚かず刀を振つて右に左りに捕手を切る去れば又恐れて退いて是れを遠巻きにすると言ふ、斯すること三日二夜に及ぶ夫れでも未だ秋山は橋の上に泰然として降伏せず動もすれば手向ひをなさんとする様子があから此りやア何う爲たら好がらう殺して取るには鐵砲と言ふ者があつたければ捕方が罪人を殺すことは法に無い如何はせんと一同考へた伏見の人々も双方の根の好いのに驚いたが就中

龍虎双勇傳

秋山猪助の勇猛に舌を巻かぬ者はありませぬ時しも正寶二年二月二十日のことであり升秋山は橋上に突立上り今は勞れたる面色物凄く眼中血走り髪はおどろに振亂して最も物凄き有様熱々其身を顧みて猪ア、吾れ過つたり引くに退かれぬ武士の意氣地で五人を切つたが此騒動を起しの基、武士の作法にあるまじき捕方共の爲方を怒つたばかりで多人數を憐れ身休勞れて斯くの有様今更此所へ御主君に逢ふたい見たいが山々故道尋ねて來りしも元はと言へば御主君に逢ふたい見たいが山々故道尋ねて海を打渡り此所まで來りし甲斐もなや今此所で自滅せねば相成らん何うせむ命なら此所を一遍切抜けて御主君様に御目に掛り壁へ死ぬ身であるにせよ御勘氣を許して頂いて夫れを土産に胸に問ひ腹に感へて起上がり四方の様子を見ておれば指方も

龍虎双勇傳

モ一勞れたか殿重にこそ守つて居るが此方に眼を配つて居りません猪如何いたして切り抜けたら水面を見ておれば折りしも二十日玄中の月は淀川の流かれに賑ざり金波銀波の漣いなみは宛ら金砂を蒔きたる如く猪ヲ、吾れ少年の内、習ひ覺へた水練の術にて此所を一度切抜けん。ヤラ身を起し欄干に手を掛くる可早いかドブリー水中へ身を踊らせました捕方の人々を其水音を聞き一同ソレ曲者が身を投げた……と言ふと忽ち又大騒ぎ俄かに川の上下流の両側に人を配つて上り來らば取押へんと目を配むる提灯は宛ら星の如く上下流の土手は爲に火事の如く數百人の八々が那方此方に嚴重に守つたる猪助が何所へも上つて來ない上つて來ないも宜ざる哉猪助は身を踊らせると其餘水中を潜つて半町ばかり上流に來たり圍むる物搦搦の河岸から來た捕手の人々が來ぬ内ふ掛かつて衣服を剣で褫奪一枚と

傳勇双虎龍

成り、氏吉の一刀は腰に差して裸体の儘往還へは出でず、袂裏新道
嫌ひなくドンと山城屋四郎兵衛の家を差して來たる、兼て大
工の吉五郎と言ふ物の話に伏見の右側に大きな人形が雨晒し
に成つて看板の出で居る内だと言ふ夫れを目的に來て見ると果
して燈火が付いて山城屋四郎兵衛としてある大きな人形の看板も
出て居り外、モ一春の夜の短かく夜もホノノと明けなんと言ふ
有様ですから伏見の商人は朝立の客に商ひをするに由つて早い
此二三日は伏見は上を下への大騒動で商人は碌々商ひをしませ
んがモ一昨夜等ア捕つて仕舞つたら去すれば今日は商ひも出
來やうと番頭が早く起きて今野籠を掛けて居る其所へバツト飛
込んで來たから番頭は見ると驚いた、糶糶一枚に帯を締めて刀ア
打込んで頭はサンバラ髪、番何んぞ此りやア……猪イヤ番頭
さん決めて熊くには及ばない賊でも何んでもないんだから……と

傳勇双虎龍

回顧り見ると云ふと伏見を騒がした猪助と言ふ豪傑だ、番へ、
エー此りやアお出でなさいまじとベタと大地へ座つて仕舞
ひました猪和郎も知つていあらう、私は不圖したところから腹
にもない此伏見を騒がした秋山猪助と申す者、何うお御主人に逢
わひて下され、番へイ……グズグズ云つたらバツサリ遣る花ら
うと思つたら番マア此方へ……と云ふので見世の次の間へ隠
して置つて外の番頭子僧にも堅く口留めをして奥へ参り、番頭旦那
……四郎何んだい、番タ、大變なひさか出來ました四郎何
うした、番此伏見を騒がした那の豪傑の猪助と云ふ人が來まし
たヨ、四郎ウム、然ふか何んぞお捕手の評判では阿州蜂谷侯の家
來廣瀬權太夫と云ふ人の家來たも云ふこと……夫れはア廣瀬
の旦那が此方に居る花らうと思つて來たんだらうが何りして來
たらう那の多人數の捕手の中を潜つて……番然ふでござい、姓

傳勇双虎龍

切抜けて来たんでございませう 四郎鬼に角那りやア役人達の方
も悪るいよ、何も様子を聞いて見りやア土坊をしたといふはアな
し罪の無い人を切つたといふ理由はアないのに罪人同様に捕
らふとするから怒つたんだ乃公でも怒る番然んなことを被仰
つたつて詮方がない……何うひませう那の人を……四郎知れな
いやうに此方へ御通し申せ家へ来たといふこと分ると大變な
から決して他人に漏れぬやうに頼み申す 番夫りやア私が受合ひ
ます。と猪助の前へ来てア貴郎那方へ出でなさいまし 猪辱け
ない……と猪助に於ては一刀を提げて其儘奥へ通りました此四
郎兵衛と申す人は廣瀬の言葉添ふあつたからではあり升が賊に
這入つた者に百兩の金子を恵む位の中々義侠の人であり升助
義士の天川屋利兵衛と云へたやうな一旦恩を受けた人には身上
を忘れるといふ去れば猪助には恩はないも廣瀬に思ふあり升か

傳勇双虎龍

ら猪助を此方へ通して四郎切て猪助さんとやら私しる山城屋四
郎兵衛と申す御辱ぬに預つた者ですが何の御用でございます。猪
助は兩手を突て 猪是は始めて御目に掛り舛未だ御知己にも成
りませぬ所へ斯る姿で参りしは如何にも以て失禮ではござい
が定めて拙者の顔はハヤ御承知でございませう心ならずも御地
を騒がせ古今未曾有の御騒動を惹起し何とも以て申譯なく實は
拙者は何州峰谷候の家臣にして廣瀬權太夫様の家來秋山猪助武
宗と申す者御當家に私の主人とは御親類合ひのことは既に存じ
て居り升る先づ私しが御當地へ乗込んで参りました一伍一什事
長くとも一通り御聞なされて下さりまは拙者は御話し申す
も耻かひいが斯くの身分の者斯ふ云ふ理由で權太夫様に助け
れ云々の次第で主人に勘氣を受け此度斯ふ云々でござる。と
今迄の次第を事細かに物語り猪助は言葉を次ぎまして 猪斯

傳勇双虎龍

次第でござるから捕手の者を切抜けて参りましたも、主君に逢ひたいばかり主人に面會いたし勘氣は許して遣はすと一言御許しがあられれば夫れを冥土への土産として深く上へ訴へて出で升る決して御當家の御迷惑には成らんやうにいたすに由つて武士の情けに一度主人に御逢はせなすつて下され。誠忠面に現はれて述べたる時に四郎兵衛の腕拱いて黙然と猪助の言葉を開居せりたが四郎イヤ猪助さん然云ふ理由で云いましたるシテ見ア伏見へ来て斯る騒動に成たのも元わと云へば御主人の廣瀬の旦那に逢いたいばかり……ア、御心根を御察し申せは御氣の毒でござい升直ぐに逢い申してへが然云ふ理由に行かぬと云ふは……ハテ猪行かぬと云ふは……四郎廣瀬の旦那はモ一當地を御立ちに成つて仕舞ひました猪グー……ひやア主人は御當家には居らぬので四郎ハイ今から丁度十日はかり跡に出立いた

傳勇双虎龍

して仕舞はれました聞より猪助は天を仰ぎ猪ヤ一残念……去りとは知らず漸くに園みを抜けて生永らへ此所まで来りし口惜しさ、最早望みは更に無し四郎兵衛の誠にて邪魔をいたりました、ヒやアモ一陸方がない此儘奉行所へ名乗つて出で首尾能く上の御法通り……と立上からんとする刀の錆りを確乎と握り四郎「アア猪助殿決して急ぐにやア及びません今名乗つて出りやア是れまで無したる心盡しも水の泡、歸らねへひやアおごいせんか猪去りとて主人に逢はれずは此儘逃げて身を隠した所か望みはない美事處刑に四郎……其所です御主人に逢つて名乗つて出たりとも逢はずに此儘出やうとも罪は同じぢやアございませんかだから少しお待ちなせへ決して悪いやうにはしない實は權太夫様は當家をた立ちなされしとは云へ行術知れずと云ふひやアない攝州有馬の温泉宿有馬屋喜兵衛方に泊つて養生なさ

龍虎双勇傳

れて居る遠くもあらぬ有馬故和郎きんが其儘では此伏見を出ぬ
内に捕縛に成るは知れたことであり外から其所は何のやうにも
秘が骨を折るに由つて伏見を忍んで有馬に行き廣瀬の旦那に一
ト目途ひ其上にて訴へ出たことなれば如何なる處刑に逢うとて
も心持ちしが好いじやアありませんか、エ、猪助さん何うです……
テ私くしが斯ふ云ふ理由で猪助さんには貴郎に一ト言御説が仕た
いばつかりで伏見で斯ふ云ふ騒動を起した何りか御勘氣を許し
てやつて呉んなさい然らば當人も死罪に壁へ行はれるとも心
持ち好く往生が出来ませう猪助さんの心根を察して私しから
れ頼み申上げるといふ手紙を一本進ませう何うです然ふ云ふ
ことにはちやア猪助さん存じますア、貴郎は世にも稀なる義
のあるれ方町人の習ひとしての上の咎めを恐れて義理ある人も
其筋へ突出たりたるに然れを斯く迄の廣瀬の家來の者だと云ふて

龍虎双勇傳

身内も及ばぬ御深切有難いとも忝けなれども御禮は言葉に盡さ
れません。有難涙に呉れて居る四郎イヤ猪助さん私は商賣こそ
して居れ曲つた事とは大嫌ひ全体伏見の奉公所の淀の藩中は町
人のみ苦しめて二本差て大きな面歩いて居る面憎いとは思へ
ども泣く子と地頭に勝たれぬ壁へ決して何もしやアしませんか
然ふなさいと深切に云つて呉れる何爲る其儘では詮方がない故
其所で着物を興へスツパリ身体を町人にさして充分に養生を
せ其日の呉れるのを待つて四郎サア猪助さん御立ちなさい……
代が何しる伏見は騒の道うことも出来な位い手配が届いて居
るから能く途中に氣を注げて喰ひ込まないやうに爲てね出でな
さい猪助さん存じ升ると猪助は落涙に及んで山城屋の家を出
で手紙を貰つて心いり〜と爲て出立に及びました成程町は
殿重に手配が付て居る猪、ソ、ソ……白痴に爲て居るアがる橋

龍虎双勇傳

長小判一枚は大したもの猪助は死んで行くのに金子杯は要らな
いと云ふ了見です就ちやア姐さんお氣の毒だが其廣瀬様のお座
敷へお連れ申しちやア呉れまいか何處の座敷だか……女ハ
お易い御用でございます御案内いたしませう猪有難ふと云ふ
ので猪助は女中に従つて山四郎の添書を携へ廊下を段々参る
女中旦那さま此れ座敷でございます猪ア、然ふか大まに御苦
勞であつた……女を返して置て猪助は衣紋を正し猪御免下
さいませ。座敷には權太夫同じく妻のおりへ今朝飯を喰べて居り
猪男の聲に箸をおき權ハイ……誰方でござるか是れへれ遣入
り下さいませ。と猪御免下さいませと廊下に座つて片手で障子を
明け夫れ一滑り込み兩手を突へて夫れへ平伏し猪旦那様御機
嫌克しうございまして大慶至極に存んじ升私には猪助めござい
升れ懐しうござい升と云われ九時に權太夫は十六の時から手置

龍虎双勇傳

に掛けて育てた猪助一遍は勘當を爲たが心から憎いとは思わな
い權ヲ、猪助も能う尋ねて来て呉れなぞ……と心には思へど
又屹度と思案を仕直して權ヲ、猪助である何用あつて是れへ
暇を遣わし九事のある者最早垢の他人である何用あつて是れへ
参つた猪ハイ……其御答めは御道理でござい升る旦那様私に
貴郎様に一方ならぬ御恩を受け海より深く山よりも彌高き所の
御世話も頂ま不圖爲たこの了間の遠ひから御腹をね立せ申上
げ其儘御勘氣も蒙つて孝助の所に厄介に成つて居りました折が
あらば今一遍御説を願つて三日でも御奉公をいたした上又改め
て御暇は兎も角も時機をばあれと待つ内に旦那様は當分祿を返
上して御浪人との何れ戻つてお出で遊ばすとの噂さではお
さいました貴郎様の御心根ては五年久六年で御歸り遊ばす事
にも非ずと早くも御察し申上げ此上は御屋敷の御門前にたりと

龍虎双勇傳

も一度御顔を拜せん孝助に聞ば一何處を當と無く御立成れ
た跡そのことア一殘念と明暮れに御主君を思わぬ日とては
さいません然るに本年正月のこと近所の者か關東より歸つて來
ての話には旦那様は伏見の山城屋四郎兵衛方で賊を退じて改
心させられたとのこと聞て飛立つ私しの悦び扱ては主は伏見の里に
ありつることホイヤ去らば伏見へ參つて御面會をいたし旅の苦
行を慰め奉らん福嶋を立つて遙々と船路で攝津の大坂へ就き
此所にれ出で遊ばすとは神ならぬ身の凡夫の悲しサ露だに知ら
づ伏見へと乗込む途中に圖らずも降つて湧たる斯れ云々
……サ圖みを抜けて來ましたも御主人様の御顔を拜し一言許し
てやるとの仰せを蒙りましたことなれば是れより歸つて速かに
上へ訴へ出でまゐりて刑場の露と消るこそが出來ますが只那の儘
で死にまゐりては恩を仇で返したる大畜生にも劣つた私冥土の旅

龍虎双勇傳

へ參らりて八逆五逆の罪恐ろしく不忠の罪は呵喚叫喚失れも更
らく厭わぬと思へば今から十年前父と母とに世を去られ乞食
と成るべき所をば御助家つた其以來親子と思ふて御深切に御育
て下された其御恩何とて忘れることが出來ませう戀しは懐かし
さに圖みを抜て來たのでござい升から何うぞ不惑と思召て昔り
の御勘氣を御許しなすつて下さいまじ猶山城屋さんから附けて
呉れたる此書翰御讀みなすつて下されと涙に咽び猪助に於ては
事の様子を物語りました御新造は女の常と爲て涙に暮れて女房
貴郎猪助が那れ程に申すのでござい升から許して呉つて下さい
ましといふ權太夫は上へ涙は流さないが腹の内へ涙を流して
權ア、斯く迄吾を思つて呉れるとは愛らしの者。いとしの者。ヨ
とこし思ひ四郎兵衛の手紙を開いて見れば勘氣を許して呉れど
いふことが懇ろに書てある其所で權太夫も決心して固より惜い

龍虎双勇傳

と思ふ理由ではない故猪助改にて勘氣を悠しました猪助は天に
拜し地に伏して大いに悦び勇み立つ時に權太夫又重ねて權
猪助予は固より汝を憎しと思ふて嗚を遣はしたるに非ず凡
そ武藝にまれ學問にまれ己れに慢心と云ふ物も出ては上達せぬ
者由つて其心を制する爲に懇と懇つて勘當いたしたるのである去
れば汝の心の直り次第再び我養子と云ふ人が爲に奉助に申付け
て福島の城下に一ツの樂を差して置いたのであり外其方が實体
に働いて居ることを捕方から日々聞及び今日は戻して養子に爲
やうか明日は許して家督を譲らうかと思ふて居る内妨げあつて
據るなく退散せぬは成らぬ次第に立至つた然し是れまで斯る困
難を排して居る面會に来るといふは開々以て見上げたる心底吾も
一旦養子にせんも云ひたる日上れば今日勘氣を許すと同時に
汝を我養子といたす廣瀬權太夫養子廣瀬猪助と名乗つて奉行所

龍虎双勇傳

へ訴へ出で處刑を受けヨ 猪ハ、ア……道は重ね、有難き其
仰せ然し私に是れより訴へ出でまひて御主君様の養子と言立てま
した時は貴郎様へ御難義が權イヤ苦しうない如何なる難義か
及ぼすとも決して苦しいからと其所で改めて親子の盃猪助は今
はモ一心に掛る山の端もなりと勇み立つて盡さぬ名殊りに涙を
流し別れを告げて立去り權太夫から貰ひ受けたる立派な衣類是
れを着て祐定の小刀に氏吉の大刀を帯し又々大坂へ出さして八
軒家から船に乗り伏見に着して二月の二十五日過日應援に來つ
たる淀藩本田侯の屋敷に至り面判所に至つて猪拙者は過日三
十石の船中にて薩摩武士と意氣地の争ひから果し合ひを爲し利
さへ伏見の町を騒がしたる秋山猪助改め廣瀬猪助でござる御當
家應援にれ出であつたる趣きを承知仕り御當家より奉行所へ引
立て頂かんと存じて罷り出でましたこのこと門番見ると黒羽二

傳勇双虎龍

重の衣類に羽二重羽の羽織大小を差して立派な者です、驚いて斯くも奥へ通づる、ソレといふので直様猪助を呼ひ入れて七重八重に繩を掛け、多くの警衛が付いて伏見町奉行所へ送り込みました、此時伏見奉行が青木備前守殿重に守つて先づ一度牢へ入れ翌日に至つて白洲が立ちまひた、白洲杯の摸様は毎度伺ひますから器して申上げます、切て備前守猪助にね向ひ遊ばして備、コリヤ其方は何れの者じや、猪、ハイ拙者は阿州峰谷候の指南番廣瀬權太夫養子廣瀬猪助と申す者でござる、備、ウム、何用あつて當地に參つた、猪、左様でござい升、當地に拙者の養、夫權太父參り居り升から夫れに面會に来りまひた、備、面會をいたしたか、猪、ハイエ面會をいたしません、備、廣瀬は何れに泊つて居つた、猪、山城屋四郎兵衛は親類合でござい升、備、廣瀬は何れに泊つて居りまひた、備、其方山城屋へ參つたか、猪、ハイ姿を替へて參りました、聞

傳勇双虎龍

まじつた所居ないこのこと、でござい升、備、三十石の船中に於て何故に薩藩と争ひを起した、猪、左様でござい升、斯ふく云々で……、備、據るなく打果したといふのか、猪、ハイ、備、三十石の船頭をなせ切つて捨てた、猪、五人の者を打果してホツと息吐き升、船頭が人殺しと怒鳴り升、からコレ法外なまを申す、な人を殺したのではありません、と云つても聞容れませんか、據るなく切つて棄てました、備、左様か、其方捕方の向つた時に何故抵抗をいたして多くの捕方人数を切り伏見の町を騒がしめたや、猪、御意にござい升、私も武士の端でござい升、事靜かに二三人の御役人出張をいたされて如何なる次第か兎に角人を殺して見れば法の許す所でないから、先奉行所へ同道いたせと武士の作法を持つて御出であれば大小を御役人に御渡し申して御役所へ御同道をいたし升、何んぞや、理不盡にも長道具を持つて四方から御取圍み

龍虎双勇傳

遊はすといふ法が有り升か、武士の作用でござらん。由つて御抵
抗をいたしました。備左様か……。御奉行も少し御考へ遊ばした
儘然ふであらう。左なくんは狂氣いたして居る様子もなし。理不
盡に捕方を切つて棄てるといふ法もなからう。と猶一通りのこと
を詢問遊ばして其日は入牽仰せ付けられ其所で御奉行が段々手
を廻し調べて見ると全く夫れに相違ない。シテ見ると猪助の罪
も云ふ者は船頭を切つた罪と捕方を切つた罪と一旦逃げたとい
ふ罪です。固より侍を切つたのは罪でない、けれど猪助の命は何
の道なないのでござい升か伏見奉行所では是を罪する理由に参りま
せん。阿波の藩へ引渡すことに成つて淀の藩中に於ては秋山猪助
を網乗物に乗せて武士の四人に仕立て役人警固を附けて徳島藩
へ引渡さんと大坂表敷屋敷へ護送に及ぶ頃阿州侯の留在居役
坪井慶左衛門動もらる淀藩の大勢表門に至り案内を乞ひました

龍虎双勇傳

此方は徳島藩中に於ては武家の作法に由つて夫れへ立出で乗物
を玄關に入れる。坪井慶左衛門威儀を正して出座あり淀藩の警護
役人に向ひ遠路送り越の厚意を謝しました。から津川宇内殿禮を
なして言出でる升は宇内貴藩の士廣瀬猪助なる者。淀領分に來つ
て數日狼藉に及び據るなく搦め取り只今御引渡し申すべく此乗
物御受取り下されしと口上し及ひまじら坪井慶左衛門 慶を
れは御配慮千万辱けなふ存ずる。と禮義に及ばれたるモ一チャン
ど知つて居り升、武士の作法に據らざればこそ當人が斯く暴れた
のである。と知つて居ります。がそれはいわぬ。直様下役に乗物を
前へ進めさして高聲に慶アイヤ此は大坂なる徳嶋藩邸なるが
廣瀬猪助是れへ出でヨ事實を申上仕るべし、コソヤ廣瀬猪助……
廣瀬猪助……と呼べと叫べと答へなし。答へのなきも道理なるが
な猪助は最早思ひ残す事なして乗物の内にて舌噛切つて相果す

龍虎双勇傳

仕舞つたので大小があつたら切腹もいたひませう可罪人のこと
故然れぬない據るなく舌嚙切つて相果たのでございます慶左衛
門は大音揚げ 慶コノ久猪助何も恐るゝ所はない早く出でヨ。と
命すれども元より死人の猪助答ふる筈なり坪井は左こそと思ひ
淀の浅川にひかひ 慶是れは意外千萬乗公の内答へなきは定め
で死人の四武家の現律に由つて必ず受取難し猶生を得は改め
見参せん速かに守り歸られヨ。と言聞かす淀の藩士も今更河ん
答へん言葉もなく固より作法の洩れたる捕方大いに耻入り却
て自藩の面目を失ひ禮義を糺し又遙々と持歸られ行く其不都合
は言葉に述べ難き次第であり升其後淀藩にて秋山の死體を永年
の預りとなり遂に大切の物と云へり此事バツと評判に相成つて
家中の不首尾諸藩の誹謗一時世上にふつとらひまじた徳島藩の
智臣坪井慶左衛門取計ひは武門の手柄と評判高く國主の名譽

龍虎双勇傳

高次に噂合ひました去れば伏見の人々は全く時の捕方が非
であると云ふことを悟つて誰一人とりて秋山猪助の勇を堪へぬ
者はなく京橋の側に秋山の祠を立て万人に徳を知らひめ紀念を
末代の今日に残されました廣瀬權太夫は其後太主より呼戻され
ましたから驚いて有馬から徳島へ歸りました直様國主に御目見
への上御褒詞を蒙り百石の御加増あり猶今迄通り忠勤を勵み吳
れヨこそ御辭あつて富田濱側の角屋敷に住居して家運芽出度く
榮へました全屋敷には伊助の靈を祭り鎮守神として武選を祈つ
た番跡も只今以て殊つて居り升る可憐勇士を殺しましたは全く
捕方の役人の至らざる所惜みても餘りあるこそ扱て跡にて猪助
が捕手の人数を切りましたのを調べて見ると死人が三十八人手
負が九十三人あつたと云ふは腕利て居たに違ひ無いかぞ存じ
升先づ是れで秋山猪助の傳記も讀切りと相成り升御退屈様……